
不思議なお話（短編集）

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議なお話（短編集）

【Zマーク】

Z40051

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

「」から読んでも大丈夫。不思議なお話たち。短編形式で基本1話完結。どうぞ「」賞味くださいませ。

ダイエット

少女はダイエットに挑戦していた。毎日のジョギングにジムでのトレーニング。

幸い徐々に結果が現れ始めていた。

そんな時少女は夢を見た。内容は以下の通りだ。

少女は言った。

「あなたは誰？」

それに恰幅がいい女性は答えた。
「私はダイエットに関する神様よ」

「用はなんですか？」

「体重を減らしてあげましょうか？」

「え、できるんですか？」

「ええ、できますよ」

「じゃあ、五キロ減らしてくださー」

「分かったわ。じゃあおやすみ」

少女は深い眠りについた。

朝起きて、少女は体重計に乗る。

少女は言った。

「やった！ ホントに五キロ減つてやる。」

そして一月が経つた。

少女は体重計に乗っていた。

「おおー！ また儲えてる」

少女は言葉半口でカバンを手にいた。

そしてある夜の夢の中でもまた、ダイエットに関する神様とであつた。

少女は怒つて言つた。

「ちよーと！ ひへー」となの！ 一戸締めたらバス五キロも
太つたじやない！」

「それは仕方ないわ。私はダイエットに関する神様であつてダイエットの神様じゃないもの」

「え、じゃあ何の神様なの？」

太つた神様は言つた。

「リバウンドの神様よ」

〔おしまこ〕

俺は牢屋から出された。数々の悪行も償い終わったのだ。男はかねてより決めていた仏門に入つた。そして月日は流れ五年が経つた。その男が座禅を組み仏像に向かいお経の修行をしていた際に、声が聞こえてきた。

『わたしは、お前の前にいる仏の像だ。この寺で一番大きな木の下を掘つてみよ』

「ウワツッ！」

男は驚いたものの、言われた通りそこを掘つた。そこから、昔のお金が見つかった。

ある時、不治の病が流行した。するとまた仏の像さまからお声が『この寺にある河原の石をすり潰して飲ませば流行り病は治る』

その言どおり実行した男は周囲から神と崇められた。不治の病があつたり回復したためである。

男はそれ以来、事あるごとに仏に頼んだ。そして、数々の奇跡を起こした。

やがて、歳をとり男は安寧な死を迎えた。

『仏様、仏様……』

（……何か、声が聞こえる。男は、死したはずだか意識があった。
ここが、あの世か……）

瞼を開ける男。眼下には拝み続ける若い男の姿があった。

「仏様、お願いです！大学に合格をさせてください……」
どうやら自分の来世は仏像のようだ。

（せせてくれないならこの寺を焼き払ってやる！）

仏像になると人心が読めるらしい。焼き払われては堪らない
と仏像になつた男は祈り始めた。

（仏さま、なんとかあの学生を合格させてあげてください……）
まさか、仏像になつてまで仏様に祈る羽目にならうとは……。

〔おしまい〕

太らない体质

私は、スーパー大食漢。でも、なぜかとてもスレンダーな〇〇。体重だつて四十二キロ。顔だつて悪くないんだから。そんな、私の趣味といえば

「いつただきまーす！…」

もちろん食べること。

ここは、近所のレストラン。椅子に座る私の前に並ぶのは、ステーキ、から揚げ、ハンバーグ定食、刺身にテンブラうどんなど。全部大盛だ。

「お会計一万五千五百円になります」

支払いを済まし、店を出る私の耳に

「あんなに食べたら、太っちゃうのにね」

そんな、ざれ言が。

ここは、自宅のアパート。

相対する私と体重計。勝負は一瞬できつした。乗る

「勝つた！四十二キロ！変化なし！」

ガツポーズを決める私。

「ポテチ、プリンにヨーグルト！…締めはラーメンに決定！」

睡眠をとるために床につく私。

「今日はいっぱい食べたよー…寝よつとー…」

『まだまだ食べれるわよー…』

「――――?」

びっくりする私。周りに人の気配なし。

壁に耳を当てる私。お隣りさんは、どうやら、就寝中。

「気のせいかしら?『にこにこ、にこにこ。』『

(――――)

なんと、自分の口の中から声が聞こえたではないか。私は、電気を付け、鏡台に向かい大きく口を開けた。そこには

「『やつほーー。』『

小さな、私がいた。

{おしまこ}

ここは、中世のヨーロッパ。

ある道を不思議な男が歩いていた。額に小さな凹みがあるのだ。ただのへこみではない、まるで一つのパズルが抜け落ちたかのよう。

ある時、桟橋で少年と会話をする、不思議な男の姿があった。
「なんで、おじさんの額は穴が開いているの？」

少年の問いに男は

「悪い魔法使いに、体をパズルにされてしまったんだ。そして、ばらばらにパズルは飛ばされてしまった。僕は、そのパズルを探す旅をしているつて訳なんだ」

その話しを信じた少年は

「ふーん。じゃあ！残りは一つだね！」
子供は人差し指で不思議な男の額を指し示した。

「うーん……」

腕を組み難しい顔をする男。

「……外は、そなうなんだけど　　」「
自身の口を両手で縦に大きく開きながら
「　中がまだ全然足りないんだ……」
男の内側は、至る所へこみだらけだった。

「おしまい

僕は、東京在住の高校生。でも普通の高校生ではない。なぜなら自分は狙われている。

小さい時からずっとだ。僕が指を「パチン」と鳴らせば雷が落ちる。

最初は偶然かと思ってたんだけど違った。

それは快晴のある日のこと。試しにと指を鳴らしたら雷雲が集まつてイカズチが落ちたんだ。そんなことが何回もあつたしね。

そして、最近気付いたんだ。

「……雷、近づいてきてない？」

そう、僕を付け狙うのは光りを打ち放つスナイパー。

それからというもの、指を鳴らさないよう注意し、指を包帯で巻いて固定した日も

あつたけな。現在は高校を卒業してから、六年が経った。今では雷様は僕に直接落ちて来る。

「ためそうか？パチン！」

ここは、草原。あるものといえば不思議な避雷針が一本。落雷は男が寄り添う避雷針に吸い込まれる。

「僕は何をしてるかって？仕事だよ！仕事

彼は自身の特異体質を使って、発電の仕事をしていたのだ。

「……どんなものも使い方しだいだね」

「おしまい」

マインドコントロールコーヒー

「ijiは、全国に名だたる飲料メーカーの社長室。
「ついにできたのか！人心をマインドコントロールする缶コーヒー
が！」

社長は開発者の報告に笑顔になる。

早速、缶コーヒーとして発売された。

「試しに我が社に呼び付けるてみろ！」
社長の指示でコントロールする電波を送り、一日が過ぎた。しかし、A企業には、人子一人現れなかつた。
「なぜだ！？ 説明しろ！」
開発担当者を責め立てる社長。
「すいません！しかし、こんな筈では……」
「まあいい、電波は出し続ける！」

そんな時、A企業前に、空き缶のまま置かれていた例のコーヒー缶が山ほどあつた。しかもそれが毎日続いた。それに対し、監視カメラを設置する会社側。

「ふふ、犯人を取つ捕まえてやる！」
いきをまく社長と部下。彼らは監視カメラの映像に見入つていた。
そこには

「カラーン、ロローン」

と一人でに転がり来るマインドコントロールコーヒーの空き缶たち。あるものは錆び付き、あるものは、傷だらけや凹んだりしている。海藻を付けた空き缶もあった。中には輸送中に脱走したのか未開封の物まであった。

真っ先にマインドコントロールあるコーヒーを口にしたのは、空き缶だったのだ。

「まさか、人以外にも色々な作用があるうどわ……」
社長室の窓から見える会社入口にはかんコーヒーが

「ロローン、カラーン、カラーン……」

{おしまじこ}

不思議な泉（前書き）

シリアルスモのひふきーとシヨーとシヨーとです。

不思議な泉

白黒のシマシマ服を着た男性は森を必死に走っていた。木々の間を抜け視界が開けた

「あつー！」

その先は、崖になっていた。真っ逆さまに落ちる囚人。

ドボン！

弾け飛ぶ水。波打つ波紋。そこは、不思議な泉。囚人はついに浮かんでこなかつた。

その泉に、逃走中の脱獄囚を追つていた男性警官が姿を見せた。

すると、不思議な泉が泡立ち始めた。そして、薄っすらと水の中に影が見えかくれし、それは、姿を現した。現れたものはたいへん美しく神々しい女性だつた。

「私は、この泉に住まう女神です。あなたは、この泉に何か落としましたね？」

女神様に、見とれていた三十代の警官は

「は、はい！落としました！」
と、慌てて言葉を発する。

「あなたが落としたのは次の内ですか？一つ目は先程、溺死した脱獄囚……二つ目は三年前、あなたに突き落とされた女性……三つ目は投身自殺した前世のあなたの白骨遺体……」

困ったことに、全て自分が落とした人ばかりではないか……。

「おしまい」

イエス・ノー花

私はO-Lをしている。最近、鉢に入ったピンクの花を貰った。若い人の間で流行っているらしい。友人が言うには尋ねると花がイエス（頷く）かノー（首ふり）で、正しい答えを教えてくれるとか。

「今回の合コン行くべき？」

試しに聞いてみた私。今まで、合コンに行って良かつたためしがない。友人の話が本当ならノー（首ふり）の筈だ。

しかし、首を縦に振る花。仕方なく

「今回だけだからね！ 良くなかつたら廃棄処分なんだから…」「

そう言いながら合コンに足を運ぶ私。

一言で言おう。行つて良かつたと。お蔭さまで、素敵な男性と知り合い結婚出来たし、子供も身籠つたのだ。

最近は新しく誕生するであろう赤ちゃんについてよく質問していた。

「私の赤ちゃんはかわいい？」

頷く花。

「産んだら私達家族は、より幸せになれるかしら？」

首を振る花。

動搖する私。頭の中で考えをめぐらせる。

「産まない方が良いわけ？」

何度も頷くピンクの花。幾度、花の指示に従つて良い出来事（結果）に恵まってきた。外れるはずがない。

私は夫の反対を押し切り中絶の道を選んだ。

「これは、地中浅く、ピンクの花が生える植木鉢の中。超小型の機械を片手に話す宇宙人。頭にはピンクの花を持っている。『地球征服作戦は第一段階幸福を与えるから、第一段階大きな不幸を与えるに移行します……』

〔おしまい〕

天才スリ師VS盗まれの達人

「…」、大都会東京でかつてない大バトルが行われようとしていた。司会の男が、自身が握るマイクに向かって

「レディース＆ジェントルマン！今回、このバトルに参加してくださいるのは……この一人です！！」

「盗りに盗つた財布の数は一百一個！という天才スリ師さん！！」二十代と思われるワイシャツにネクタイを着崩した青年が手を上げ現れた。

「対するは、財布を盗られた数は十一回という！盗まれの達人！君子さんです！」

天才スリ師に対面する形で逆サイドからずんぐりしたおばさんが現れた。

「二人には、発信機をとりつけてもらいます。また、君子さんの財布とその中身も証拠としてし撮影してあります。現在時刻午前七時。バトル時間は三時間！バトル範囲は東京全部！君子さんは盗まれないか、盗られた瞬間にきずいたら勝ち！天才スリ師さんは相手にきずかれず財布を奪つたら勝利です！賞金は百万円！！」

「それでは、天才スリ師VS盗まれの達人。バトルスタートです！」

「おーっと君子さん猛烈なダッシュを見せます！スリとの距離は百、

・・・

！」

「一百と離れていきます！一方スリはなんと！靴紐を結び直しています！これは、明らかに見失つてしましました！」

君子さんは、ラッシュショアワーを利用しようと切符を買い、地下鉄に乗り込んだ。

「フウ……きつきつだけど。これで時間が稼げるわー！スリもいないしね」

『スリ師がようやく動き始めました！もうすでに開始から20分を経過しております』

「そろそろ下りようかしら？もひ、2時間も乗つたから見つかりっこないわ」

君子さんは、都心から大分離れた場所に来ていた。

「あら！スーパーがあるじゃない。余裕だから買い物しちゃおつとー！」

「今日は、キャベツが安いわね！」

君子さんから数メートル離れた花売場に帽子を口深に被り、ジーンズにポロシャツ姿の男がいた。

それは、服装を変えた天才スリ師ではないか。

携帯電話に出た天才スリ師。

「ああ、見張り代は払ってやる。お陰で相手は油断してやがる」
そういうと、スリ師は買い物力ゴトを持ち、その中一杯に造花を立てて並べた。

（店の監視力カメラに見つかれば君子さんにばれる）ことになる……慎重をきつせねば

君子さんが左手に開いた鞄、右手に買い物力ゴトを持ち直進していった。

君子さんの反対方からスリ師がやつて来た。君子さんから見て右手は手ぶら、左手には造花が詰まつた買い物力ゴト。

近づきあう二人。

ついに、君子さんの開いた鞄とスリ師の空の右手が重なつた
素早く動くスリ師の右手。財布を君子さんの鞄から抜き取る。
(盗つた!)

(！！！？)

盗つた財布は、鞄と薄での紐で結ばれている

紐の張りで鞄を引かれ振り向くこととする君子さん

「ウワツ——！」

滑りこけるスリ師、君子さんにも当たる——
「きや——！」

造花が空を舞う。重なり倒れる二人。

「すみませんでした！足を滑らしてしまつて……」

帽子を深く被りながら謝るスリ師。

「いえ、いやいや……」

（帽子ぐらに脱ぎなさいよねー）

内心怒りながら立ち去る君子さん。

（勝った！！）

俯き、ニヤつくスリ師。その手には、ナイフと君子さんの財布が握られていた。

盗った財布とあらかじめ渡されていた君子さんの財布の写真と見比べるスリ師。

「やられた！ フヨイクかーー！」

怒るスリ師は、腕時計で時間を確認する。

『AM 9:55』

「つこに結果は出ましたー天才スリ師さんより盗れなかつたとの申告を受けました。まさかの君子さんの勝利ですーー君子さん財布を見せて下さーーー！」

「うふふ、財布を盗られ過ぎてこいつ内ポケットを上着にこり

えましね……！」

上着をめぐり内ポケットを見せ付ける君子さん

「な、ない！ないわ！？どういうこと！？」

ここは、君子さんが帰り（買い物後）に降りた地下鉄の駅。

「初めてスッたけど、簡単だつたな、あの太つたおばさん」
そう言つたのは男子高校生。

「なんと、なんと最後の最後にどんでん返し！－財布が見つからため勝負はドロー－！次回はどんな対決が見られるのでしょうか－？」
！－？こづ、『期待！』

〔おしゃべり〕

未来からの着信

今は高校に徒歩で通学中。ポケットの中で鳴り響く俺の携帯電話。見たことのない文字が携帯の画面に並んでいる。恐々と電話にでる俺。

「もしもし。」

電話の向こうでワイヤワイヤ喜んでいる声が聞こえる。

「あつーー めじーちゃんーー? 僕は孫のサシマだよーー。」

間違い電話だらうと思い電話を切らうとする自分。

「ま、待ってーー! 今、説明するから。これは未来から電話をかけているんだ。おじいちゃんの名前は磯 力 オでおじいちゃんのお姉さんが ザヒさんだよねーー?」

考えるカツオ。話が本当に孫をなしているということは将来の自分には奥さんがいるはずではないか。気になり問い合わせるカツオ。

「僕のお嫁さん何て名前ーー? 力オリちゃん、それとも早川さんーー?」

「名前は、えつと。旧姓で山口つと……花 花子さんだよ」

「グワアアー————！」

通学路で携帯を握り膝をつき、叫ぶ ツオ。

「あらー？どうしたのよ 磯くん！？」

通学途中にカツオを見かける花さん。同じ高校に通っていたのだ。叫ぶ ツオを心配し駆け付ける。

花さんが駆け寄るのに気付いた ツオは
「来ないで————！」

「おしまー」

俺は、借金を完済したと言つ男から、招き猫を購入した。というのもこの招き猫。これを手にしてから、一千万円あった借金。それが土地が売れ、帳消しになつたというのだ。

ものは、試しと云つて、消費者金融から、十円ほど借りて。一日中パチンコをつづてみた。勝ちに勝つて、八万円プラスの十八万円にアップした。早速消費者金融に返済しに事務所に入った。

「十八万円！？ たつた一日で！？ それはあんまりだ……」

恐持ての男達に渋々持ち金を手渡した。

借りた金でやつたのがいけながつたんだろう。そう思い立ち、宝くじを自腹で購入した。

結果は、なんと一千万円が当たつたではないか。何に使おうと一階建てのリビングで思案していると、急に家が揺れ始めた。なんか男は助かったが、家はおしゃかに。大型の地震だった。結局建て直すのでお金は、全て消えてしまった。

建て直したリビングで招き猫を凝視する男。怒りを招き猫にぶつける。

「招き猫よ、お金を増やすのは、いいのだが。減らすのは、止めてくれないか？」

すると木製テーブルの上。招き猫の口が開き喋り始めたではないか。驚く男。驚きのあまり、ソファーから立ち上がった。

「わっちはねひき猫。世の中は、良いことばかりで成りたつてません。良し悪し、あい倅わざつてできてるんや！試しに三億円あげよつかいや？」

男は、驚き込んでしまった。三億円分の不幸……

{おしまー}

「……、大都会東京でかつてない大バトルが行われようとしていた。

司会の男が、自身が握るマイクに向かって

「レディース＆ジェントルマン！ 今回、このバトルに参加してください
るのは……この一人です！！」

「天下無双の豪傑！ 弓術、馬術にも優れた人物！ 呂布選手です！！」
東から不思議な門を潜る人物が。巨体をほこり戟を振り回しながら現れた。

「対するは、日本が誇る武人！ 一天一流兵法の使い手！ 宮本武蔵選手です！」

シーン。

「これは、どうこうことでしょうか！ いつに姿を現しません！
これが噂の兵法でしょうか？！ 呂布選手は、特設リングでお待ちください」

観客に紛れて、怪しい動きをする一団があった。

一時間が過ぎた。

三時間が過ぎた。

「臆したか武蔵！？」

リングの上。椅子に腰掛けていた畠布が立ち上がり戟をリングに打ち付け怒りだした。

「六時間が経過しようとしています。武蔵選手、未だ姿を現しません」

異世界に通じる門から人が現れた。しかし、現代風の出で立ちである。

「貴様が武蔵か！？これだけまして品があると思ひなよーー？」

リングを跨ぎ越えた畠布が詰め寄る。

そして、男の胸倉を引き上げた。

「ひい！違います！武蔵選手に急ぐよつこと伝えてきたのですーー。振り上げていた戟を降ろす畠布。やつこ口調で質問をぶつける。

「奴は、何をしていたのだーー？それとも俺に降参したとこいつとか？」

縮こまつた男は、恐る恐る答へる。

「武蔵選手は、お腹の調子が悪いとのことです。遅れるもよひです…」

掴んでいた男を放り投げる畠布。

ひくつく畠布の額。血管が何本も浮き出ている。余りに頭に来たのか

「クソガー！」

そういうながら、自身の武器である戟を真つ一につに折つてしまつた。

結局、一日経つていた。新たに太陽が昇り始めたのだ。呂布は、武蔵への伝達作業員との度重なる、やり取りの間に自慢の弓と矢も全てへし折つてしまつていた。

「……やや、武蔵選手がやつてきました！！刀を一本腰にさしています！ルールは、相手を倒すか負けを認めらしたほうが勝ちです！ついにバトルスタートです！！」

リングの上、睨み合つ達人一人。一本の刀を構える武蔵に対して一につに折れた戟を手に戦いを演じる呂布。

武器がしょぼくともさすがは、天下無双の呂布。右、左、上下と凄まじい攻撃を見せ付ける。

「おーっと、凄まじい戦いです！怒る呂布選手は折れた戟一本で武蔵選手をリング端へ追い込みました！これは、万事休すか武蔵選手！」

「お前の負けだ！武蔵！負けをつ！…」

「俺がなんだつて！」

呂布の喉に一本の矢が突き刺さつていた。毒が塗られていたのかふらつく呂布。そこに、武蔵の必殺の一撃が呂布の腹に放たれた。切り裂かれる鎧と肉。

「ガツフー！……伏兵！？かはつ……」

倒れる畠布。血が周りへ広がっていく。鎧兜も赤に染まつた。

「伏兵も、兵法のうちだ！刀も特注だしね」

「なんと、なんと最後の最後にどんどん返し！…まさかの伏兵…！…次回はどんな対決が見られるのでしょうか！？」う、『期待！』

「おしまい」

ここは、病院の一室。ぼんやりと窓から空を眺める少年がいた。その少年には、いくつかの痣があつた。正確には五つで額、右腕、左腕、右足、左足だつた。彼は、自宅が火災にあり、生き残つた、ただ一人の人間だつた。医師は尋ねる。

「何も覚えていないのかい？」

頷き肯定する少年。

「君の火傷の痣を消す手術を行うことになった。計五回に分けて行う。君の祖父母さんの依頼によるものだ」

火災により死亡したのは三人。少年の妹と父母だ。焼け方が大変酷かつた。

一度目の手術を受けた少年。手術は成功だつた。

手術のあつた晩、少年は夢を見た。大変リアルなもので、少年の父母が殴り合いの喧嘩をしていた。原因はただの痴話喧嘩からだつた。そこえ、母が包丁を取り出し父を刺したのだ。腹を押さえ倒れる父。

そこで、はつとなつて目覚めた少年。そこは、いつもの病室。開けた窓には雀がとまり「チュンチュン」と鳴いていた。

「目が覚めたかい。術後は順調なようだね。……次の手術までは羽をのばすといい」

医師はそういうながら右腕の包帯を取り替えると病室を後にした。

一度目の手術後。その晩また、現実味のある夢をみた少年。内容は、動かなくなる父。錯乱する母を押さえる妹。謝つて包丁が母に刺さり倒れる母。血による水溜まりが出来ていく。母を間違つて刺した包丁。それを手にする妹と目が合つ自分。

「ガバッ」と布団を押し上げ目覚めた少年。背中には冷や汗でベッショリと濡れていた。

「大丈夫！ 成功だ。後は三か所だけだよ」

少年は、術後に見る夢が恐ろしくなり医者に手術の辞退を嘆願した。

「今のうちなら完全に消すことが出来るんだ。それを受け付けることはできないよ」

医師は、左腕の包帯を新しい物に変えると病室から出でていった。

そんな時、少年は呟いた

「僕にある火傷の痣が消える時、僕の心には、更に大きな心の痣が出来ていることだろう……」

{おしまい}

我輩は蟻であります

我輩は蟻であります。こゝは、ある御自宅の庭。我々の家はこゝにあるのであります。

「あつ、蟻の大行列だー！」

保育園児ぐらゐの幼児が嬉しそうに木の枝で我々、蟻たちを叩きます。大変痛いのであります。

「でも、変ね？ 何も無いのに、こんなに並んで……」

幼児の母親が小首を傾ける。

一方蟻たちは

「惜しい方を亡くしましたのであります……」

そう口々にしながら、強敵『幼児』に噛み付いた勇者。彼を背に乗せ行列は、墓地に進む。

〈おしまい〉

暑がり

暑い、暑い。いや、熱い。

誰か助けてくれ。いつたい何回呼び掛けたことか。

誰しもが私を見ながら、ひとつとして気にしてくれない。私は何時まで、熱に耐えなければいけないのか。

おー、神よ。私をこの焼ける熱から解放してくれるのはいつのことなのだ。私は太陽。前世は悪魔王サタンなり……。

{おしまい}

修行僧 仙人

「ここは、人里離れた山の深奥。耳に伝わるのは小川の囁きや鳥のさえずり。今まで、ここにやって来た人間はたった一人。

「苦節二十年。仙人高望^{せんにんたかのぞみ}はついに、二大秘術を習得したぞー！」

そう巨大な岩の上で、叫ぶこの男のみであった。
小鳥達が大きな声に驚き逃げ出す。

身なりは無精髭にボロボロのカッターシャツにジーパン。顔は明らかな中年親父。

「二十歳より、進んで山に籠り（最初の理由はホームレス）、一つ目として、人の心を掴む（モテたいだけ）術を手にしたのだ！ 待つていろ大都会東京め！」

「ここは、大都会東京。人々のこつた返すなか。仙人は早速！ 美人を我が者とする 」

「すいません。ちょっといいですか？」

隣を見遣ると警棒片手に様子を疑う美人警官の目が。

人の波が頻繁に来る高校生の通学路で叫んでいたためおさえられたようだ。

「ここは、駐在所内。机越しに対面した形の婦警と仙人。

「あれは、何が目的だったの！？」

「ワンワン！」

美人警察官と警察犬に責め立てられる仙人高望。

（これは、人心把握術（モテモテの術）チャンスかもしれない！効果は、事前に確認済みだし……）

「くらえ！人心把握の術！！」

両手を開き、前に差し出す仙人。反応を伺う。

「なによ！」

変化がない美しい婦警さん。

ガツクリうなだれる高望。その双肩に両手がそれぞれ置かれる。

そして、聞こえてくる声は

「はあー、はあ……」

と息遣いが荒いではないか。しかも艶がある。俯いている仙人の表情が邪になり顔を上げ

「わおーーん！！」

「ギャーー！」

色っぽかつたのはなんと、犬の方ではないか！

「い、こらーラッキーどうしたの？」

戸惑う婦警をよそに尻を向け逃げ出す仙人。しかし、ラッキーが一本の前足で捕らえた。

「いやだ……」

いきり立つたラッキーのあれば高望の時代劇でよく見る天下の副將軍様の部位へ一直線に

仙人は、悲痛な雄叫びをあげた。術は野生動物でしか試せていない
かつたのだ。

仙人さんは、尻の痛みを抑えるために、室内温泉に来ていた。薄い布で腰を巻き、シャンプー等を桶に入れた。そして、洗い場所へとやって来た。

五つある洗い場の真ん中へ陣取る仙人さん。

「あつ！」

「なんですか！？」

声に驚き振り向く仙人さん。

そこに立っていたのは化粧をしたオカマさんらしき人物。ワイン

クしながら

いし異が、かたら「」

「グハッ！」

仙人様は冷や汗をかきながらもシャンプーをしようと手を伸ばす。

するとひじか何か棒のよつなもとに当たつた。

「あん！ ハツチなんだから！」

（グワアーーー！ なんてもんに！ しかもなんで隣！ ？ 他にも空いてるじゃん！）

なるべく早く洗い済まそうと頭、顔と洗い、体を洗うタオルを探す。しかし無い。

そんな時お隣さんから声がかかる。

「タオルないんだつたら、これ貸しますよん」

頭をフルスロットルで回す仙人。だが、否定理由が思い付かない。しかたなく

「あ、ありがとうございます」

隣は化粧を落とし、オカマからオッサンへと脱皮を果たしていた。

突つ込みたくなる衝動をなんとか堪えた仙人さま。 気を取り直して借りたタオルに、ボディーソープを垂らす。異様に黒っぽいゴシゴシタオル。黒いのを右手の指でつまみあげる。そこには、何度も波打つ毛が。

（どんだけ毛抜けてんだーーーーーーーー！）

それで体を洗つた仙人の体には、新たに縮れた体毛が何百本と育まっていた。

（どんだけーーー！ なんで生えたの！？）

取り敢えず洗い終わった仙人様はタオルを返した。それに対しオカマさんは

「」の、タオル着替え場所に落ちてたのよ。確か名前も……あつたあつた！仙人高望だつて！」

（俺んだ————！——じゃあ、なんでさつき普通に使ってたんだ————！——てかつ俺名前書いてる——超恥ずかし……）

湯舟に浸かる仙人さん。湯加減が調度いい。

「ふうー。窓から見える月が綺麗だなー。酒が欲しい

「やだ！綺麗だなんて恥ずかしい！」

横を見るとまた、同じオカマ（顔は親父）がいた。

（オメエじゃね————！——だから近いって……）

「あつーお酒持つて来たのよん」

「えつーありがとう！いいの？」

オカマさんが差し出した桶には熱燗の瓶二つに黒いオチョコが二つ。オチョコを渡すオカマ。受け取った仙人さんの小さなオチョコが白で満たされる。

「ほう、白酒か。温泉に入りながらの、月見酒とは粋だねえ……んぐんぐ」

熱燗の瓶を持ちながらオカマは

「さつき、持つてくる時にお酒を零しちやつて。あたしが頑張つて補充しちきましたよん」

ここは、温泉宿のロビー。購入したコーヒー牛乳の蓋を外し液体を口内へ運ぶ。

「フハーー！やつぱこれがないとね。温泉はー『クッゴク』

「あ、それあたしので薄めたコーヒー」

また勢いよく吐き出す仙人
通りかかるたおはせんの浴衣にかかる

1

卷之三

(お化粧は施されている)

「わ、わお詫びに揉んであげるん」

オカマ（おじさん）さんは、仙人様の声が聞こえないのか一人話し始める。

「わたし、顔はこんなだけど、彼氏いなわけよん」

（そりゃ、そうだろ？その顔じ
イテテテテ！心の声聞こえてる

?

「そして、ついに運命の人を発見したのん」

「良かたね」

痛みからなあなあで返す仙人。

「あなたよーー！」

脱兎のごとくお支払いを済ませ荷物片手に温泉宿を後にする仙人
なのであった。

ここは、魚屋さんちの横路地。仙人は盆栽教室に隣接する銭湯を見ながら神経を集中させていた。

(第二の秘術。 ンポ生やしの術をもつてすれば、ムフフなことも可能だ! 女湯の座椅子全部に ンポを生やし、一斉に…… ムフフフ)

交通量がまばらになつてきた時間帯。風呂屋へと足を運ぶ者が増え始めた。時間帯は夜中の七時。まだ弱冠に太陽の日差しを感じる。

「いくぞ！」
ソボ生やしの

小型の車が排気ガスを撒き散らしながら仙人の前を走行した。

「ふえつくしょん！の術！」

ここは、銭湯横の盆栽教室。今日も二十人の受講生を前に先生が、教鞭をとる。

くしゃみによつて、第一の秘術がコントロールを誤つてなんと盆栽の右枝とすり変わつた。

——ちゅわん——」「——

「又オ――――――!」

「お、おい大丈夫かい！？」

大声に驚いた魚屋さんの店主が駆け寄つて来る。商店街を歩く人達も口々に、「大丈夫かしら」とか、「どうしたのかしら?」と囁きあつてゐる。

「粹の良いナマコ捌いてたとこなんだ。ほら、これ食いね!」

優しい魚屋さんからナマコを手渡された仙人。口に運ぼうとして驚愕する。

「俺の ンポじやねえか ！！」

どうやら、魚屋さんのナマコも、排氣ガスのせいでの ンポに変わり果てていたのだ。

（つてか！魚屋気付けや！何捌いてんねん！…）

内心、毒を吐く仙人さんは立ち上がり内股で歩き出した。

（痛い……）れからは、この術は止めよつ

そう決心する仙人。彼の背後の生け簀には大量のナマコの代わりに多量の仙人の ンポが浮かんでいた。

「おしまー」

お地蔵様

「」は、とある田舎。そこのある道端沿いに一体の地蔵様がありました。その前にはオショコとお皿が置かれていました。

近くに住むおばあさんは毎日、毎日お地蔵様にも食べ物や飲み物をお供えしてあげていました。

しかし、不思議な事に次の日になると決まって供えた物が無くなっているのです。

おばあさんは、その理由を探ることを決心しました。そして、お地蔵の近くにある大木の裏に隠れて見ていました。

懐中電灯でずりと照らしていくと突如、お供えしていたあんパンやオレンジジュースが消えたではありませんか。

驚き駆け寄るおばあさん。しかし、何も分からぬ「」はできませんでした。

「」は、貧民達が暮らしが、食べ物もほぼ無い別の国。この国に小さな村がありました。

そこには、一体の像が奉られていました。その像には誰が置くのか毎日、お供えものが置かれていました。それを、村人は大変喜んでいました。

今日、置かれていたのはあんパンやオレンジジュースでした。

{ねつめこ}

意志

私は柿です。今は必死に地面に落ちぬよう木にしがみついています。このままではいけない。木にならなければ。

願いが通じたのか柿の意志は、木に移り変わった。

(良かつたこれで、落ちる心配をしなくてすむ)

そして、一日経つたある日。極めて強い台風がこの地方を襲った。

(いけない、このままでは柿の木が倒れてしまう! なんとかしないと)

するとまた、願いがかなつたのか、山に意志が移つた。

(これで、一安心だ)

それから一月すると、柿の木から移つた山が伐採され始めた。

(ここままでは、宅地開発されてしまう! なんとかせねば……)

またまた、願いが通じたのか山の意志はなんと地球に移つた。

(ここまでくれば大丈夫だろ?……)

「私は地球……」

ついには星になつた元柿の意志。

しかし、深刻な温暖化や、異常気象が地球内を襲つた。

(「Jのままではいけない。次は……」)

「おしま」

幸福吸収機

「ついにできたぞ！幸福吸引機！」

説明しよう。幸福吸引機とは、周囲から（生物）幸福を引きずりだし、その幸福を独り占め出来ちゃうすんじい機械なのだ。

「早速起動！幸福を私に向けてつと！」

掃除機に似たその機械のスイッチを入れる。「ブイーン」と吸収音がし始めた。

「ふふ、今後が楽しみだぞ」

一週間後。

「うははは！一千万円を拾つたぞ！ヤッホー！」

一ヶ月後。

「万馬券ゲット！」

一年後。

「株でボロもうけ！」

博士は、最近気になつて「いる」とある。

博士宅の「近所さんたちが皆、なんらか不幸な理由で立ち退いていったのだ。しかも、まだ幸福吸収機は作動し続けている。この機械の吸収範囲は、余り広くないはずなのだ。吸える人物がいるとしたら、博士ぐらい。しかし、博士は幸福そのもの。

「もしや、私の未来の幸せを吸つているのでは……」
それを、知るには未来にならないことには……。

{おしまこ}

『見てください！太陽が西から東に沈んでいくのがご覧いただけるかと思います！』

俺はテレビに目をやりながらポテチを啄む。テレビには、方位磁石と共に東に沈む太陽が映し出されていた。

『こんな、現象が起きるのは何かの前触れかも知れません、プリン』確かに異常事態ではあるが自分にとっては、明日の仕事が大切。俺は床に入り次の日を迎えた。カーテンを開ける。気持ちいい月光が差し込んで来た。

「なんで、朝なのにお月様があるの」

テレビの時計で時間を確認する。
そして、自分の声が高くなっていることに気付いた。

「まさか！？」

便所に入り男女の確認をする。そんななかテレビから朝一番のニュースが流れれる。

『大変です！太陽が西から東に沈み出してから、男女が逆転したもよづです！その他にも……』

〔おしまい〕

いにしえのラッパ

「これは、とある立派な御自宅。

主婦は、押し入れを片付けている際にある物を発見した。それは、古ぼけたラッパ。そのラッパに張り付けてあった紙には呼び出したい人を想像して吹くとその人物が現れるとのこと。

少し考える主婦。

（福の神なんてどうかしら！）

早速、浮かんだ妙案を実行に移す主婦。息いっぱい吸い込んでラッパの中に吹き込んだ。「ブブーー！」と鳴る古ぼけたラッパ。

すると、主婦宅のチャイムが鳴つたではないか。胸を弾ませながら玄関まで小走りする主婦。開かれる扉。

「いらっしゃ、！－」

驚きを顔にだす奥さん。それもそのはず。

「私は、金銭を担当する福の神です」

その人物からは、常人からは感じえない福々しさが漂っていた。
「俺は健康運の福の神だ」

「あたしは、恋愛運の福の神よ」

「おいらは、事故災難を担当する福の神ぞ」

等々、総勢数百人はいるであろう福の神達が自宅前で舞めきあつ

ていたからだ。

{おしまこ}

僕は、中学生。最近、近所に住む天才博士から大変便利なマシンをもらつたのだ。その名も「勉強君一号」。

勉強君は、僕そつくりな外見を持つロボットである。勉強を僕の代わりにしてくれて後で握手することで勉強内容を受け取ることが出来るのだ。最近のテストでは、満点ばっかり。鼻が高いのである。

「もう、遅いから寝よ」と

・

真つ暗な部屋。「キリキリ」と鳴る音。少年は息苦しさで目を覚ました。そこには

「明日から俺が人間になる ー」

機械の指で締め付けて来る勉強君一号。少年は、薄れ行く意識の中

（まさか……握手の際に僕から勉強君に余計な情報が送られていたのでは……僕が勉強していれば……こんなことは……）

「おしまい」

俺は、財布を拾つた。しかも、ハイキング中に空から降つて来たのだ。中を開くと数百万は入っている。俺は、その金で豪遊しまくつた。

使い切つた辺りでまた、例の財布を開くとまた分厚い諭吉さんがいるではないか。それからも、何度も遊びまわる。

その頃。天界では。

「私は神だが。交番（天界の）に落とし物として財布はあがつてないかね？……無いなら良いのだ」

「あなた、財布を無くしたの？」

「そりなんだ。寿命と引き換えにお金をくれる財布だつたのだが……不老不死の我には問題ないが。もし、寿命がある者の手にでも渡つていたらと、きがきじやなくてな……」

〔おしまい〕

大名上戸

「 「 「 かんぱーい 」 」

男三人が、飲み屋でワイワイと飲みあつていた。次第に一人が『大名上戸』に入り始めた。三人ではよく知られたものだ。

「 我をどなたと心得る！ 東北を支配した大名であるぞ！ 」

「 よー！ 大名でした！ 」

「 いいぞ！ いいぞ！ 」

次々に運ばれる酒に料理。平らげていく三人。

「 東北の 山にある大きな顔をもした岩の下を掘れ！ 金、銀、財
宝山ほどあるぞ！ 」

「 よつー！ 」

「 あつぱれ大名様！ 」

ここは、場所が代わつて東北の 山、大きな顔をもした岩を除けた後。温泉掘りに業者が借り出されていた。機械で穴を掘る男の腕が止まる。

「 うん！ ？ なんだ！ ？ 」

その場所を発掘すると大判小判、ザックザック。出るわ出るわ昔の貨幣。

{ おこせ }

人生のページ屋

「最初に言つておきますが。あなたに人生の一頁を差し上げる代わりに、一ページ分あなたからお代としていただきますが。よろしいでしょうか？」

そう言つた男は、黒ローブに身を包み、水晶玉を前に置いている。まるで占い師といった様相。ここは、アパートの一室に設けられた『人生のページ屋』。部屋は暗幕が張られ蠅燭の光りしかない。

「構わない！俺の人生は平凡過ぎて耐えられないんだ！」

そう、言い返したのは中年のサラリーマン。今は、午後七時をまわっている。

「平凡が一番だと思いますが……。では、どういったものがよろしいでしょうか？」

リーマンは、先に決めていたのか即答した。

「モテたい！ しかも若い子に！」

「わかりました。では、叫んでください。YES WE CAN！
と…」

「YES WE CAN！」

サラリーマンは手を高々と上げ全力で叫んだ。

「最高だー！たまらねー！おじさん倒れちやう！」
サラリーマンは我が春を謳歌していた。両手では、収まらない美女を侍らせ夜の街を行く。

『人生のページ屋』の看板が裏返される。『休業中』へと。この部屋の主、相模大地の手には数枚の宝くじが握られていた。
「ありがとうございました。三億円も頂いて……」
相模は笑いが顔から離れなかつた。

〔おしまい〕

『お前は、民を救つた英雄！神のわしに願いを言えれば叶えてやる』

神に対し中世の騎士は、答えた。

「山のような金塊が欲しい！」

『分かつた。受け取るがいい！』

すると、空高く雲を割つて落ちてくる物があつた。

近づいて来るとその巨大さがわかつた。慌てて逃げる英雄。しかし、逃げきれず「ドスーン！」と、金塊の山（高さ、幅共に数千メートル級）に潰され生き絶えた。

それから、英雄は自身の命と引き換えに國を潤わせたヒーローとして永年語り継がれたのだった。

（おしまい）

人生のページ屋2（前書き）

人生のページを見ないとわかりにくいかも知れません。すいません

m () m

人生のページ屋2

『人生のページ屋』の糸で吊された看板が跳びはねる。ここは、アパート。

「あたしをお金持ちと結婚させて欲しいの！ねえつたら！」

この女が激しくノックする。名前は春井桜。会社勤めで事務員をしている。姿はそこそこの二十八歳。

「先程も話しましたが。人生の一ページですのでね。お間違いなさらぬよう！」

休みの朝早く叩き起された相模大地、三十歳は念を押す。

「分かったてば！でどうすれば良いの？」

「叫んでください。YES WE CAN！と！」

「分かったわ！YES WE CAN！」

春井桜は結婚した。しかも、玉の輿に乗つてだ。お相手は、ＩＴ関連会社の御曹司様。

待ちに待つた裕福な時は、訪れなかつた。

「我が家家の家訓は、一に質素。二に節制。三、四が儉約。五が堅実！」

とお姑様。

大変厳しい家の定めにより、予想した贅沢な生活から掛け離れてしまつた桜。

・・・

「はい、ありがとうございます」

相模大地は、春井桜が元、勤めていた会社。その役員から札束が入つた封筒を受け取つていた。

「彼女に払う筈だった、肩たたきによる退職金の一部です。どうぞ

「おしまい」

ここは、三十世紀。いろいろな進歩や変化があつたがもっともなのが星たちであろう。

「私は太陽なり！」

なんと、星が意志を持ったのである。太陽は、自身の熱を利用した商売を行つていた。

代価は太陽を潤す適度な水と栄養満点の肥料だ。
彼が始めた商売とは、熔鉢炉と日照だった。
そんな中、水星と話し込む太陽。

「何！？火星の奴が俺様太陽の悪口を言つていただと！許せん！」
次の日には、太陽系から火星が消えました。文字どうり消滅したのです。

三十世紀は、太陽を中心とした恐怖政治が台頭していたのでした。

「おしまい」

僕は、一本の木だ。まだ、小さく周りは大木ばかりで空というものが見たことがなかつた。近くの大木達に空とは、どういうものか聞いたが

「美しい」

やら。

「氣高い」

等要領を得ず。大木の一本に

「大きくなつたときの楽しみにしていなさい」

と言われた。僕は期待に胸を膨らませながら成長していった。

ついに頭一つ木々の間から木の先が出ました。待ちに待つた瞬間。そこから見えた景色、それは小さな明かり一つだけでした。他は暗いだけ。

なんと、木が生えていた場所は、少しの光りしか届かないとしても深い谷底だつたのです。

「だからつてなんなのさー、僕は諦めないぞー、空をこの田で見るまではー！」

今までの大木たちの言葉が気遣いだったことを知った彼でしたが。
しかし、彼はめげません。空を一日見るまでは……。

「おしまい」

熱き戦い

「へいえーたあー。」

繰り出される攻撃。

「グワアー。」

倒れ消え去る相手。

「おーーーおつやーーとつやーー。」

必殺の連携技が何体もの敵を消失させた。しかし、正義側も

「うわーー。」

「ザー」という水の音と共に流される石鹼の一部たちなのでした。

{おしまこ}

「ちょっと写真を撮らして欲しいんだけど」

ゲーリー氏は、親しい友人に頼んだ。

「ああ。もちろん良いとも」

（）には、ゲーリー氏のご自宅。発明家である彼は、最近は専ら友人を招きお茶会をしていた。

そして、帰り際に写真を撮るのだ。このカメラの正体は被写体がカメラを使っている人物を批評した結果を収めるものだが。

「カシヤ！」と一眼レフのカメラが鳴く。

「わざわざすまないな！！」

（）かツンとしたゲーリー氏に疑問を抱きながらも友人は帰路に着いた。

「彼もか！」

ゲーリー氏は一人怒り、自身の携帯電話にある友人グループから先ほどの人物を削除した。

「妻子は……撮影するのは止めておこうか……」

ゲーリー氏の友人グループには、初めは百人以上いたのだが……
今では一人も……。

〔おしまい〕

私は超能力者だ。といつても一つだけなんだけど。

「あ、『ゴメン遅れて！』

今日は『デート』。ハチ公前で待ち合わせ。相手の男性はかなりのイケメン。

「いや、いいよ三時間ぐらい」

「こんなに、待たせて大丈夫かつて？それが私の力『心の鎖』の能力よ。相手を自分の虜にする。

「今日は、あなたの親御さんに会うのよね？」

そして、彼の家にやつて來た。

「はじめまして、大沢莉子といいます」

「莉子さん。来るのをお待ちしていましたよ」

「ああ、どうぞ」

彼氏の両親の歓待には驚き入った。

四人が座るテーブルには、豪華な食事が並んでいたし

「莉子さん、これ少ないけど……」

渡された封筒の中を見て驚く莉子。軽く数百万円入っているではないか。

「これは、受け取れません！」

「受け取って頂戴。あなたを見ると、何かしてあげないといけない気分になるの」

そう言つ彼氏の父母の顔には莉子の能力がかけていないけどかかっていた。

（もしかして、『心の鎖』は、数等親まで作用があるのかもしけない……マイナスはないわよね……）

心中、不安を感じる莉子なのでした。

{おしまい}

「露天風呂最高！」

男三人が露天風呂に浸かっていた。ここは、山奥にある秘湯中の秘湯。ここに、行つた人に、行方不明者が出ているぐらいだ。

「別に危ない所なんてなかつたよな？」

「ああ、確かに。悟はどう思う？」

しかし、返事も姿なかつた。動搖する一人。

「なんでだ？ わから……」

「ズボツ」という音共に温泉内に吸い込まれた勝也。それを目撃した奈多は悲鳴を上げながら湯舟から上がりうとした。が温泉が口を閉じたかのように奈多を挟み込んだ。すると、地中から声がするではないか。

「……逃がさないぞ！ 久しぶりの」」飯

温泉淵の岩に挟まれながら尋ねる。

「うへつー……お前は何なんだ？」

すると、地響きしながら答えが返つてくる。

「……我は、この地下に封じられし巨人だ。温泉とやらは、俺の口
といつわけさ！」

その後、奈多は、かみ砕かれ巨人に飲み込まれていった。

「おしまー」

痛
い

痛い、体の一部が黄色に変色して來た。堪らない痛みに倒れ行くものもいた。次は赤い色だ痛すぎる。正に赤信号といった様子。

そこを、若者の男が通りかかった。

「イチヨウの木が紅葉して綺麗だなー」

「おしまい」

『言い残した』

「……ある一時。セヒロム、布団で横になるおばあちゃん。それを囲む、息子と医師がいた。

「ふぐわっ……」

息子の手を握り何かを言おうとして、息を引き取るおばあちゃん。
「残念ですが……」

「母ちゃん……」

あれから、数年が流れた。

仏壇で線香を焚く息子。立ち上る煙が亡くなつた母の形になつた。驚きから声が出ない息子。彼をよそに話し始める母。

『あんたは……』

『……か。言い残したことがあつたんだね』

『……結婚しなかつた』

「……」

『あんたは不器用』

『あんたは不器用』

『あなたは、頭の回転が遅い』

『あなたは……』

つかり線香を握り潰した息子なのでした。

「おしまい」

言ひ残した」（後書き）

最近の疑問は、「不思議なお話」に書く内容は暗いのと明るいの
どちらがおかしいのです（――）

男飛ばしじょっく

自分で書つのもなんだけど私は美少女高校生。最近は寄つてくる男子どもをわざわざのに苦労していた。

そんな時、全国発売されたのが「男飛ばしじょっく」。その名の通り、寄つて来る嫌な男に吹き掛けると興味を無くしちゃかへ行つてしまつといつ商品だ。

私は今登校中。早速オオカミ達がやつて來た。

「桜ちゃん！一緒に登校しよう！」

と長身の美男子。

「相変わらず可愛いね！ 今度デートしようよー？」

そう言つたのは、顔が少し面長な美男子。一人とも同級生だ。遂に秘密アイテムの出番だ。

「へいえーー！」

「プシュー」と男飛ばしじょっくを一人の美男子に吹き付けた。

「うわー！」

「どわーー！」

もくもくと上^あがる煙。大量の煙が一人を覆^{おお}った。

「やっぱ、かけすぎたかしら！」

足早にその場を後に^しする桜ちゃん。煙幕が晴れたその場所には

「君はなんて雄々しいんだ！」

「いや、君こそなんて優雅なんだ！」

桜ちゃんにスプレーを吹き付けられた一人が人目も憚^はらず抱き合^つっていた。

スプレーの注意欄には『多量に吹き掛けるのは厳禁です。』

そう書かれていた。

「おしまい」

仙人

「ここは、アパート。

インターホンの音がしました。

「あ、はーい」

この部屋の主である賈腸が弱い中年男性がドアを開けます。

「あれ？」

辺りを見回しますが誰もいません。気のせいかとドアを閉め振り返る中年男性。

「……！」

「……やあ！ 私は仙人だ。姿が見えなかつたのがその証拠である

振り返つた青年の目に飛び込んで来たのは禿げた頭、長い白鬚を蓄えた老人でした。

「そなたに我が秘術をおすそ分けしようと思つて伺つたのだ

「どのような術なのですか？」

「わしが悩みであつたものを治す術じや。ではいくぞ……はあ！」

仙人の掛け声と共に赤い光りが中年男性にぶつかりました。

「うわ！ 説明も無しに！」

恐々した様子の中年男性。ですがぱつと見自分に変化はありません。

「恐縮ですが。仙人様の悩みといふのは？」

「フム」といつた様子の仙人は言います。

「聞いて驚け。……便秘じや」

胃腸が非常に弱い中年男性は、腹を抱え走り出しました。

「グワアー！ トイレ——！」

「おしまー」

彼女

「」は一軒家。 その玄関をノックする音が。

「はーい。 どうぞ」

ノブを回して入つて来た人物は家主である彼女が高く見上げる程背が高い男性でした。 男性は、彼女を見下ろしながら話し始めました。

「あなたは犬です」

「はあ！？ あなた、頭大丈夫なの？」

背が凄く高い男性は彼女に近付いて行きます。 そして彼女をひょい抱き上げ囁きました。

「優秀過ぎたロボット犬の末路か……」

「おしまい」

青年と悪魔

「」は、アパート。

インター ホンの音がしました。

「あ、はーい」

「」の部屋の主である若い青年がドアを開けます。

「あれ？」

辺りを見回しますが誰もいません。気のせいかとドアを閉め振り返る青年。

「……どいつも」

「……」

振り返った青年の皿に飛び込んで来たのは黒いスースーにグラナントかけた角刈りの男でした。

「私は、悪魔です。あなたの願いを一つだけ叶えて差し上げましょ
う……」

自身を悪魔と呼ぶ人物からまがまがしい気配を察知した青年はその話を信じました。

「じゃあ……」

悪魔は付け加えるように言います。

「……ただし。あなたの寿命十年と引き換えです」

一瞬思案した青年でしたが、自分の年齢が二十三歳だということ
で願いを口にしました。

「僕の前に二億円置いて欲しい…」

悪魔は「パチン」と指を鳴らすと姿をくらました。そして、
青年の前には数え切れない万札が現れました。

「ははっ！ これで僕も億万長者だ！ うん…？ くつ！」

青年は、心臓の痛みに膝を着き遂には生き絶えてしまいました。
青年が住むアパート。その屋上で先ほどの悪魔はニヤつきながら
呟きました。

「……自分が短命だとも知らずに……クククッ……」

「おしまー」

死神

「ここは、アパートの一室。そこで大学生が胡座をかき寬いでいた。

インター ホンの音がした。

「あ、今開けます」

開いたドア。しかし誰もいない。

「いたずらかな？」

大学生は、戸を閉め振り返った。

「！！」

そこには、赤いスーツを着込んだ恐持ての男が立っていた。

「……私は死神です。今見えなかつたのが証拠です。それでは死んで頂きます！」

怯える大学生に右手の人差し指を向け赤い玉を飛ばした。

「イヤだ――！」

赤い玉は自身を庇う男の両手にぶつかつた。死を覚悟する大学生。

しかし、なんともない。目を開ける大学生。周りに死神の姿は見当たらない。

「なんだ、気のせいいか」

そう言いながら右手で頭をかく大学生。

「……ない……俺のふさふさな髪が！」

「……」は、夜空。空を舞つさつきの死神。

「……私は毛根の死を司る死神。先程の大学生は何か誤解されていたようだ……」

「おしまい」

天使

「これは、アパートの一室。そこに住んでいるのは、中年男性でした。

するとインターホンの音がしました。

「あ、はーい」

ドアノブを回し扉を開いた中年男性。しかし、誰もいません。

「つたぐ！ いたずらかよ！」

ドアを閉め振り返る中年男性。

「！ ！ ！」

「私は天使です。姿が見えなかつたのがその証拠です」

振り返った男性の前にいたのは一枚の白い羽を羽ばたかせる美少女でした。

「願いを一つだけ叶えるためにやつてきました。何か願い事はありますか？」

「……俺を世界一の金持ちにしてくれ！」

ニッコリと微笑むと天使は姿を消しました。それと引き換えに天使がいた場所から万札が溢れ出しました。

「ウハハハ！ 金だ！ 金だ！」

部屋いっぱいにお金がつめつくされても止まらずお札がバンバンでてきます。中年男性はお札に顔以外を埋めながら言葉をもらしました。

「がふ！ もう、いい！ ストップ！ グガガ……」

お金は止まらず出現し続け、中年男性は埋もれて動かなくなつてしましました。

〔おしまい〕

ここは、アパートの一室。インター ホンの音がしました。立ち上がる家主である人間不振の男性。彼の人生にはろくなことがなかつた。裏切り、つぶしあい、仲たがいなどなど。

「……はい。あなたはどなたですか？」

人間嫌いでもある彼はドアを押し開いた。
そこには、後光がさす美女がいた。

「私は神様です。不幸なあなたの願い事を三つだけ叶えてあげます」

それに、対し人間嫌いの男は息を荒くしながら

「うそをつくな！ そんなもの（神様）は存在しない！ セツセと
帰つてくれ！」

それに対し神様は答弁します。

「わかりました嘘はつきません。私はこの瞬間から神様ではなくなりました。分かりました出ていきます」

神様だった女性は悲しそうな表情を浮かべながらアパートを後にしてしまった。

「おしまい」

楽しい夢販売所

『楽しい夢販売所』。そう書かれた看板を横目に来店する四十代後半の男。

自動ドアが左右に開いた。

「いらっしゃいませ！」

出迎える一人の男。その小さな店には机と机を挟んだ二つの椅子、それと大きな棚それだけしかなかつた。

「 セセ、 じゅりくじゅりぞ」

店員に導かれ椅子に腰掛ける四十代の男。反対側に店員が座つた。

「早速ですが、じついつた夢を」要望でしょつか？」

店員の質問に質問で返す四十代の男。

「危険性や副作用はないんだろ？な？」

「もちろんで」」ぞ」ます。我々は安全安心第一を心情に商売をせでいただいておりまはすゆえ……」

「フム、ではハワイで一週間過ごす夢を売つてくれ」 店員は棚に近寄ると、引き戸を開けた。そして小箱を四十代の男に差し出した。

「」の中の飴を寝る前に飲まれば大丈夫です。お代は一万円になります」

支払いを済ませた四十代の男は帰路についた。

今は夜中の十一時。四十代の男は飴を舐めてから就寝した。

「ここは、四十代の男が見る夢の世界。そこにはハワイの砂浜と透き通った海が広がっていた。

「ウハハハ！」

四十代の男は、海を平泳ぎで堪能していた。ひとしきり泳いだ男は砂浜に上がった。

「疲れたー」

「そこまでだー両手を挙げろー。」

四十代の男の周りには四人の警察官が取り囲んでいた。

「なんだ!? どうこいつ」とだー?」

疑問を口にした男に警官の一人が答えた。

「私達は夢パトロール部隊だ。あなたが現実の世界で三億円にのぼる脱税をしていたことは分かっている! 現世ではあなたは逮捕づみです! 早く目を覚ましなさいー!」

なんとしたことが逮捕されてないのは精神だけとは……。

（おしまい）

殺し屋

ここは、大きな邸宅にある書斎。数々の本やら書類やらが棚や机に堆積する。そんな中、ここの中である大次郎が机に向かっていた。

そんな時書斎の戸口をノックする音が。

「はい。どうぞ」

大次郎の声と共に開くドア。入つて来た人物は黒いスーツを着込み、その手には消音器付きの拳銃が握られていた。

「な！？ なんだお前は！？」

侵入者は「ツカツカ」と革靴を響かせ、大次郎に近づき向き合つとピストルの照準を大次郎に合わせこう言つた。

「私は殺し屋です」

慌てはためく大次郎は無我夢中で説得する。

「ま、待つてくれ！ 金なら払う！」

「いえ、金では駄目です。あなたには十六歳になつたばかりの娘さんがいましたね？ 彼女を私に下さい」

「！？」

予想外の展開に動搖する大次郎。

「そ、そんな無茶な……」

「では、死んでもらいいます……」

殺し屋は、引き金に人差し指をかける。その指に力がこも
「分かつた！ 分かつたから止めてくれ！」

「では、娘さんとの結婚を許可してくれるんですね？」

「ああ……もう！ そうだ！」

根負けした大次郎の言葉にピストルを下ろす殺し屋。その殺し屋
の後ろから大次郎の一人娘が現れた。

「『めんねパパ……。相手（結婚相手）が相手だけに力押ししかな
いと思つて……』

〔おしまい〕

「ここは、大きな邸宅。そこのインターホンが鳴った。家主である男Aがドアを開け応対に出る。

「はい、どういった御用でしうつか？」

ドアの外に立っていたのはスーツを着込んだ青年だった。青年は快活に喋り始めた。

「前世の記憶をお届けにまいりました。差出人は前世のあなたです

「前世！？ なんだい冷やかしかい？」

「いえ、違います。我々の会社は創立数百年の老舗でして……これがパンフレットになります」

青年が鞄から取り出したパンフレットに目を通す家主の男性A。

「確かに……しっかりした会社のようだ。社名も知っているよ。そういう部署があつたのだね」

「はい。この袋に入ったカプセルを寝る前に服用されれば効用がでますので……」

そして、夜になりカプセルを飲んでダブルベットで眠りにつく男

性A。

「」は、男性Aの夢の中。そこは劇場。椅子に腰掛け喜劇を見る男性Aと妻と従者達。

（これが、俺の前世か……）

男性Aが感慨深げに辺りを見回していくと後方から声がつきわたつた。

「リン 一ン大統領！ 覚悟！」

声と同時に「ズガーン」という発砲音。弾丸は男性Aの後頭部に直撃していた。

「うわあー！」

そこで目を覚ました男性A。飛び起きる。

「あなた!? 大丈夫?」

隣で寝ていた夫人が尋ねる。

「ああ、すまない……」

「変なカプセルなんて飲むから……。明日はテキサス州でオープンカーによるパレードがあるのよ。ジョン・F・ケネディとしての…」

ノックの音が。

「こ」は、一軒家。家主である中年男性が返事をする。

「あ、はーい」

戸口を開けると「こ」には黒い装束を全身に纏つたがたいの良い男が立っていた。その男は口づさんだ。

「私は忍者です。あなたには死んでもらいます……」

「何を馬鹿な」とを。あなた頭大丈夫で……」

中年男性の腹に深々と突き刺さる刀。

「ぐふつ……」こんな……」

そこで息絶える中年男性。

今は江戸時代真っ盛り。頭がおかしかったのは……。

「ここは、上流階級の朝の食卓。父母と子供の三人で食事をする。小学生になつて間もない少年が喋り始めた。

「お母様。最近僕、同じ夢ばかり見るんだ」

「どんな夢を見るの?」

豪華な朝食を食しながら子供は母の問いかに答える。

「それがね、いつも同じ夢なんだ。えっとね、まず日曜は……ロープで縛られてる夢で……」

食事を済ました父親が疑問を口にした。

「ロープ? 嫌な夢だな。それに日曜はつて、曜日によつて決まつた夢を見るのかい?」

「うん、そうだよ。それで月曜日がね……声が出ない夢。火曜日は狭い所に閉じ込められてる夢で水曜日は真つ暗な夢。木曜日は川を泳ぎ切り、金曜日は山を登り谷を越え、土曜日には楽園にたどり着いたんだ」

「変わった夢だな。さあもう行かないと学校に遅刻するぞ」

「わかったよ。パパ……」

「ここのは、場所は代わって通学路

「パパ達信じてなかつたなー……」

先程の子供か一人歩いていた。

とそこへ、一台の車が通りかかった。開くドア。覆面をした男達が降りて来て少年をロープで縛つた。そしてガムテープで口を塞ぎ、車の荷台に小学生を詰め込んだ。動き出した車。

まさに一瞬の出来事だった。誘拐犯の力量がでていた。

狭く、暗い空間に閉じ込められた少年は考えていた。

（イタタ……正に夢の通りだ。狭い所に閉じ込められてる。次は川を泳ぎ切り……出来るかなー？……その次は山を登り谷を越え、最後には楽園にたどり着いたんだよね）

いつたい楽園とは……。

{おしまい}

サラリーマンの大次郎は通勤途中に紐を見つけた。しかもただの紐ではない、空から延々と延び下がって大次郎の肩ほどの高さに紐は存在していた。

「……これはいつたい？」

疑問を口にしながら大次郎はその紐が極めて甘美で魅力的に見えてしかたなかつた。

大次郎以外の行き来する人間にはそれは見えていないようであつた。みな何も無いかのように素通りしていくのである。

大次郎は、その紐を握らずにはいられなくなり両手でがつちり掴んだ。

「うん！？」

大次郎は浮遊感を感じ浮き上がつたように思えた。大次郎はおもむろに下を見た。

「大丈夫ですか！？」

そこには、倒れた大次郎を中心としてちょっとした人だかりが出来ていた。大次郎に呼びかける青年。救急車を呼ぶ女性。脈をとる壮年の男性。

しかし、なぜか安寧な気分に浸る大次郎にはこれが当然の理であるかのように思われた。

大次郎の倒れた体は蟻のように小さく見え始めていた。

雲を抜けた先で紐は止まつた。

「ここは……」

その大きな雲の上には見上げる程高い塔が建つていた。

「ここは天国です」

声のした方向に顔を向ける大次郎。そこには、一枚の白い翼を持つ美しい顔立ちの女性が立つていた。

大次郎は口を開いた。

「あなたは天使ですか？ では私は死んだのですね？」

「そうです。私は天使であなたは死にました」

「人を天国に誘うときはいつもこういった方法を？」

「いえ、それは若い天使達の流行りです」

大次郎が辺りに目を凝らすと何人もの若い天使がロープを下に垂らしていた。

天国

「ここは、雲の上の天国。

「でも、天国に来れて良かつた。てっきり地獄に墮ちるものだとばつかり……」

大次郎は、一億円に上る脱税をやらかしたことがあったのだ。

一対の翼を持つた天使は大次郎に向かつて喋つた。

「天国は二十階級に別れています。大次郎さんは上から十四番目の階になります。こちらへどうぞ」

雲の上を歩き天使に着いていく大次郎。フニャフニャして柔らかい地面だった。

天使に案内されたのは雲の上の塔に設置されたエレベーターであった。

「大次郎様は六階になります」

地上にあるものとそつ変わらぬエレベーターに一人が乗り込むと天使はボタンを押した。閉まるエレベーターのドア。浮遊感を与えながら動き出す。

「天使さん。階級の意味は何ですか？」

大次郎の質問と同時にエレベーターは開いた。著しい熱気がエレベーター内に流れ込んで来た。

「それはですね……善の行いから悪の行いを差し引いたものになります。階級が下になるほど死後の世界で……痛みや苦しみを感じるようになります」

大次郎がエレベーターから降りて真っ先に目に飛び込んできたものはぶくぶくとゆだつ大窓にマグマを噴き流す山々だつた。

「この度、天国と地獄が合併致しまして……」

閉じ行くエレベーターのドア。大次郎の耳には途中までしか届かなかつた。

「おしまー」

ここはとある公園。疎らに人が行き交う。青一色の晴天が冬の一日を温めていた。

ベンチに腰掛けさつき拾つた奇妙な携帯電話を眺める高校生男子。学生服を氣崩し不思議な携帯電話を凝視していた。

高校生が握る携帯電話には左から赤、白、黄色の三つのボタンがあつた。試しに赤いボタンを押し携帯電話を耳に宛てがつた。

すると、「プルルー」と呼び出し音が。そして相手が出た。

「……もしもし、私は神様です。何か願い事はありますか?」

「ハハハ。神様? ふーんじゃあ雨を降らして見てよ」

高校生は、青空を見上げながら意地悪く頼んだ。

「分かりました」

「うん!?」

空を見上げていた高校生の目に飛び込んできたのは暗雲がどんがらともなく現れ空を支配する光景だった。

つこには「ポツポツ」と地面に小粒な雨が降り始める。徐々に雨

足は早まり、土砂降りに変わる。高校生は慌てて公園の公衆トイレに避難した。

「まじかよー」

早速、不思議な携帯電話の赤いボタンを再度押し耳元に携帯電話を持っていく。神様から帰ってきた言葉は

「一回きりです」

押し問答をする高校生。しかし結果は変わらず。

「ちりー！ しょうがねえ。白いのをー！」

奇妙な携帯電話の白いボタンを押す高校生。電話を耳に寄せる。

「……あい。神だがなんかようか？」

「願いを叶えて欲しいんだ」

「ああ、良いよ何？」

「俺の財布を万札でいっぱいにしてー！」

「あーいよー」

喜び勇んで自分の財布を開く高校生。そこには万札ビリヤド一千本の五千円も無くなっていた。

頭に血が上った高校生は白ボタンを乱雑に押しまくる。

「何？ 一回だけだよ」と神様。

「なんで俺の財布の中が空になつてんだ！ 意味がわからんねよ…」
「ああ、それは俺様があまのじやくな神だからよ」
「みらう

「ク、クソ！」

それで電話はきた。もう一つ黄色のボタンがあつたか、どうす
るか迷う高校生は頭を右手でおさえていた。

最後は恐る恐る人差し指でゆっくり押す。

「……もしもし、神様だよーん。願いはなんだよーん？」

うたぐり深くなつた高校生は質問する。

「あなたはどんな神様なんだ？」

「みーは、命を回る神様だよーん

「命ー？ ふーん、じゃあいいや。バスで」

そう言つと高校生は奇妙な携帯電話を「み箱に放り投げた。
しかし電話はまだ繋がつていた

「おーい！ 寿命を延ばすべきだよーん！！ あなたは寿命が短命
だよーん！」

奇妙な携帯電話を弄つていた高校生が鞄で雨から頭を庇いながら
公園を出た時、トライックが突つ込んで来た。

「ププーーーー！」

「おしまー」

宇宙人

「ここは安いアパートの一室。あまり生活衛生上良くない物の散らかりかたを見せていた。住人は平凡な中年男性だ。そこのインターホンが鳴った。

「あつ、はーい」

ドアを開ける中年男性。しかし、そこには誰も居なかつた。

「なんだ。気のせいいか」

ドアを閉め振り返る中年男性。

「！…！」

散らかつた部屋の中に美人女性が立つていた。

「私は宇宙人です。見えなかつたのが証拠です」

「な、なんのようなんだ」

中年男性はメタボな腹を摩りながら怯えていた。

「我が星では男性が不足していて困っています。我が星に来て小作りに励んでもらえないでしょうか？」

自身の平凡な毎日に嫌気がさしていた中年男性は一つ返事で返した。

「いいよー 行こう!」

「では、私の手を握つてください……」

美しい女性は右手を中年男性に差し出した。その手を両手で掴む中年男性。すると一人の姿は消え失せていた。

その後、中年男性は幸せに小作りに励みましたとさ。

「ギョーハーーー！」

しかし、中年男性は叫びながら走っていた。彼を追うのはこの惑星「球地」の女達。皆さん極めて美しい顔立ちをしていた。

「グワアアーー！ 男は嫌だーーー！」

実はその星の女性は見た目が地球でいうところの男だったのだ。中年男性の女難(?)はまだまだ続くのであった。

{おしまこ}

「私と勝負したいのはあなたなの。アイク」
カトリー・ナは余裕を感じさせる口調で話す。

「そうだとモ、カトリー・ナ！ 勝負は何人の死傷者をだしたかでいいな？」

「ええ、もちろん。先手はアイクに譲るわ」

「いいだろ？ 俺の力を見せてやる！」

アイクの言葉と共にカトリー・ナは姿をくらました。

「アメリカを死のうずで覆つてやる！ くらえ！」

アイクの力は凄まじくアメリカから五百人を越す犠牲者を出した。

「どうだカトリー・ナ！？ 俺の力は？」

「ええ、なかなかだと思うわ」

姿を現したカトリー・ナは上から目線でものを言つ。

それから年がいく年流れた。

「……ふふ。アメリカよ悲鳴をあげなさい！」

カトリーナが叫ぶやいなや大きな力が働き死者千八百三十六人、行方不明者も七百五人をだした。

「どう？ アイク？」

悔しそうな口調でアイクが話す。

「負けたよ……カトリーナ。君が最高のハリケーンだ……」

〔おしまい〕

「ここは、一人住まいの老人宅。ここの中のインターホンがなりました。

「はいはい、今行きますからの……」

おじいさんはゆつぐつとした呪どりで一軒家の玄関から玄関を田指します。

ドアノブに手を伸ばすおじいさん。そして玄関の扉を開いた。

「誰もおひそめの、……」

しかしそこには誰も居ませんでした。ドアを閉め振り返るおじいさん。

「うわっ……」

そこには、雷柄の黄色いトランクスを履き、背中には円形に配置された十一個の小太鼓（叩く面が前を向いている）を腰に巻いた紐で担いだ上半身が半裸の男が立っていた。

「私は雷神です。お宅へ入室の際に見えなかつたのが証拠です。おじいさんに折り入つて頼みがります」

雷神様に驚き、入れ歯が口から半分飛び出したおじいさんでしたが入れ歯を手際よく直すと何もなかつたように会話に参加します。

「……どんな頼みですかのー？」

「唐突ですが……雷神様を変わってくれませんか？　不老不死になりますよ」

「雷神様！？　うーむ、不老不死は良いのじゃが……」の老いぼれにできるかのー？」

考え込むおじいさんに雷神様は明るい口調で話します。

「それは大丈夫です。雷神様になれば年齢が二十代になりますので……」

「せつかくだしやつてみようかのー？」

そして話しさはまとまつた。

雷神様は腰に巻いた紐を解き玄関に太鼓を立て掛けた。さらに雷柄のトランクスを脱ぎおじいさんに差し出す。

「！」の雷神のパンツは洗濯は禁止されております。それと上半身は裸。これが太鼓を叩くバチになります。この十一個の小太鼓をそのバチで叩けば雷が落ちます」

おじいさんは意を決したように裸になり雷柄のトランクスを履いた。最初はブカブカだったパンツもおじいさんに徐々にフィットし始めた。何と最後には雷神様と同じ顔と体格になっていたのだ。

「雷神様これは！？」

振り返つて雷神様を見たおじいさんの目に飛び込んできたのはついさっきまでの自分と全く同じおじいさんだった。

「入れ代わったのだよ。雷神様の仕事は一日に三人の人間に雷を落とすことです。できなければ天罰として雷があなたに落ちます。死にはしませんが段違いの痛みを伴います」

「！！ そんな話聞いたらん！ なかつたことにしてもらいたいのじゃが」

「嫌です。私はもつ何千年と雷神様を勤めあげたのです。変わつてほしければ他の人に頼んでください」

・・・

途方にくれた新たな雷神様でしたが雲に乗つて空を飛んでいると氣分が和らいできました。

「なに、犯罪者を見つけて雷を落とせば良いだけの話。どこかに…」
「！！ 警察官に追われている！ 悪く思わんでくれよ」

新たな雷神様はそう言つとバチで小太鼓を叩きました。「ズギヤン！」と音をたて大きな雷が警察官達から逃げる男に落ちました。

「ここは地上」。雷が落ちた男は絶命していました。追い付いた警察官一人は話します。

「運が悪こじこせんだな。雷が落ちるよ……」

「全くだ。食い逃げなんかするか?」

「しかし、変な事を言ひこせんだつたな……」

「ああ。『自分は雷神様をしてこてこての世界のことが疎いんだ……』だわい」

{おこせこ}

「」は、ある高速道路。そこで大渋滞が出来ていた。原因是大三郎氏のスリップ事故による玉突き事故だ。

大三郎氏は多量の血を流し朦朧とした意識の中で確かに何かが羽ばたく音を耳にした。

「くつ！」

転倒し、上下逆になつた車の中で大三郎氏は沸き起つる怒りを感じていた。

足音が大三郎氏の車の開けつ放しの運転席の窓の横で止まつた。

「大三郎さんまた会いましたね。まさに運命……」

大三郎氏は苦しげな声で会話をします。

「うぐつ……また貴様か……クソ天使……」

「ふふふ、大三郎さんが危険とあらばど」までも……さて私の両手に一枚のカードがあります。片方のカードは生を、もう、一枚は死を大三郎さんにプレゼントするものです。右手と左手どちらのカードを選びますか？」

天使が持つ右手のカードの大三郎氏が見えない面には『生』と書かれてあり、左手のカードは『死』だった。

「くつ……左……」

「左手でよろしいですね？」

「ううぐう……そうだ……早く……」

「……分かりました」

天使がそう言つた瞬間、天使の左手のカードが『生』に、右手のカードが『死』に文字が変わつた。

「はい、どうぞ！」

天使はそう言つや屈み込んで逆を向きの大三郎氏に『生』のカードを見せ付けた。

「クソ！　まだいたぶるきか！？」

しかし、そこにはもう天使の姿はなく代わりに救急車やレッカー車、パトカーが到着していた。

助け出される大三郎氏や玉突き事故の重傷者立ち。

救急車で搬送される大三郎に向かつて救急隊員はつぶやいた。

「また、あなたですか大三郎さん。今月にはいつて一十回目の搬送ですよ！」

大分容態が落ち着いてきた大三郎氏。彼は揺れる車の中で仰向けに横たわった状態で怒りのこもつた口調で言った。

「……文句があるなら悪魔のよつた天使に言つてくれ！」

「こゝは、空。大三郎氏の前に現れた天使が空を舞つていた。彼は急に憤怒の表情を浮かべた。

「ムツ、大三郎さん。また私の悪口を言いましたね！ 悪魔のよつた天使とは！ 許しませんよ！ 次は……」

じごく耳の天使は何かを考える表情を浮かべながら猛スピードで空を飛んで行つた。

まさに口は災いの元である。

〔おしまこ〕

お帰りー

「ただいまーー。」

「お帰りー やしゃ孫よ」

「家に帰ってきたやしゃ孫は楽しむつた。」

「今日の回収会は楽しかったよー。」

「やうが、良かったの。」

「といふでみんなは?」

「ねじこさんは暗い口調で言いました。」

「わしら以外は成仏して旅だつてしまつたぞい。……」

「やうか……残念だ。じゃあ、このお墓で一人暮らしだね」

{ おしまじ }

ここはアパートの一室。住人は三十代の逞しい肉体を持つ男性だ。椅子に腰掛け雑誌に目を通していた。

インター ホンの音が不意に鳴った。三十代の男は雑誌を机に置き立ち上ると玄関まで行き扉を開けた。

「俺は泥棒だ！ 金めの物を差し出せ！」

突然の来訪者の右手には鋭利な包丁が握られていた。
しかし物おじしないこの部屋の住人は言った。

「お前も運が悪いやつだな」

家主はポケットから拳銃を取り出し泥棒に向けこうつ言った。

「両手を上げろ！ 現行犯で逮捕する！」

なんと住人は……。

{ おしまい }

「」は平凡な一軒家。家主は書類で一本本を読んでいた。

そんな時インター ホンが鳴った。今は月曜日の午前中。」の時間帯にやつて来る人物に見当がつかず、玄関を指す家主の男。

「はい、今開けます……」

家主の男が玄関の戸口を開くと厚手のコートをはおった男が立っていた。その男は強い口調で言った。

「私は刑事です。あなたを現行犯で逮捕します！」

刑事と名乗る男はポケットから手錠と警察手帳を取り出し手帳を家主に見せながら家主に手錠をはめるため身を乗り出した。

家主の男は言った。

「待つてください！私はなにもしていません！」

「だからですよ。二十五世紀にはいつてからは働かないことは犯罪とする。そう決ましたのですから……」

「おしまこ」

福の神

あるボロいアパートに非常に貧乏な男が居ました。

突然インター ホンが鳴ります。

貧乏な男は歳のわりによろよろとした足どりで玄関に行き扉を開けました。

「……誰もいない」

貧乏な男はそう呟くとドアを閉め施錠し振り返りました。

「……」

そこには福々しい小太りの人物が片手に大きな白い袋を持ち立つていました。

「私は福の神です。私があなたの部屋に入室したのが見えなかつたのがその証拠です」

「そうですか……どういった用件でしうか?」

「不幸なあなたに幸福をお持ちしました」

そう言ひと福の神は袋から金の粉を取り出し貧乏な男に振り掛けました。

「なにも起きませんが……」

貧乏な男は歎きます。

「おかしい……なぜなにも起こらないのか？」

福の神はやうやくながら何度も金の粉を貧乏な男にふりかけました。

ところで貧乏な男が口を開きました。

「たぶんですけど……私の家系は貧乏神に呪われていると……代々語り継がれています……」

なんと恐りしき貧乏神の呪いかな……。

{おしまい}

今は西暦一千百年。不景気が長く続き大量殺人等を犯す「キレる」人間が多く世の中を乱し続けるそんな時代。

政府は、この難題の解決をはかるためある装置を開発した。

ここはとある公園。向き合つ二人の男。両人血走った目から常軌を逸した様相が伺える。

「おい！ お前には悪いが死んでもらひやせー。」

長いナイフを握る男が真剣を抜き上段に構える男に向け声を荒げた。それに真剣を構える男が言葉を返す。

「それは、こっちの台詞だ！ 行くぞ！」

真剣を振りかぶりながらナイフの男に詰め寄り刀を振り下ろし

また、ナイフを持つ男も一步も退かず凶器を突き出した

『キーンー』といつ高音が殺しあつ二人ののうずこに響き渡った。

「うぐう……」

膝をつく真剣を持つ男。

「くはっ……」

ナイフの男も頭を押さえながらうずくまる。

立ち上がった一人は凶器をその場に残し歩み寄りどうりともなく握手した。

「悪いことをした。許してくれ」

と元ナイフを握っていた男。

「ああ、もちろんさ。こちらこそ悪かった。すまん」

そう言つたのは元刀を握っていた男。

その二人は抱き合いお互いが互いを褒め、励ましあつた。

これは政府が開発した安全装置による効能である。安全装置とは、人が「キレる」状態に入ると作用する空氣中に散布されている特殊な成分によるものであった。

「おしまい」

暗い世界

「今日も暗い、この狭い空間には嫌気がさす……」

彼はただ一人暗く小さな世界にいた。そこは彼にとって酷く窮屈であった。たまに小さな衝撃やこの世界 자체が回転したりする。やんな世界と彼。

「……」

浮遊感を感じる彼は動搖する。何かに掴まれた感触がした。

徐々にこの暗い世界に光が差し込んでくる。まるで皮をむくよう

にである。

と不意に女子の声が聞こえた。

「みかん食べよっと」

(そりか私はみかんだったのか……)

{おしまじ}

神々の住まう世界。そこの一毛で頭を抱え悩む一人の神様がいた。

「うーん……どうしたものか……」

彼は雨を司る神様。悩み事は飢えた貧しい国々に雨ではなく栄養満点の神の世界のスープを降らすかどうかだ。

「やはつまつはおけんー！」

雨の神様は神の世界の法に触れるのを知りながらスープを雨の代わりに降らせた。

飢餓に苦しむ人々は大変喜んだ。

ここは貧しい某国。そこにスースの男性に物乞うする見るも無惨な男の姿があった。

「おねがいしますー 助けてくださいー……」

その声の主はさぞとなくあの雨の神様に似ていたような……。

「おしまこ」

偶然（前書き）

久しぶりの投稿です。拙い作品ですがどうか温かい目で見てやって
ください m(ーー) m

留守宅を泥棒が物色中にインター ホンが鳴った。

「……ちつ！」

インター ホンが鳴り続けるので頭を巡らし、その家の人の友人のふりをして応対にでる泥棒A。

「はい。今あいつは留守にしてまして……」

「俺は泥棒だ！ 痛いめをみたくなければ金をだしな」

新たな訪問者、彼もまた泥棒であった。

「いや、えーと……」

最初の泥棒Aは困惑していた。

「さつさと金を出せ！」

迫つてくる泥棒Bの手にはナイフが握られていた。

泥棒二人が玄関内で問答しているとまたインター ホンが鳴った。

「……！」

外から勝手に開かれる玄関のドア。そこから現れたのは

「死にたくなかつたら有り金を出しな！」

なんとまた……。

「メントや評価等いただけすると大変やる気がでます。もし、よろしくれば一言でも嬉しいのでお願いします」（――）

拙い作品ですが見てやってください m(_ _)m

タイムマシン

「ついに出来たぞ！ タイムマシン」

そう言つたのは二十五歳の男性A氏。 ここは男性専用の地下室。 いろんな機材やらが置かれている。

「これを使えば……」

彼の手には懐中時計が握られていた。 これこそがタイムマシンだつた。

「一十年経つて結婚してから知つた……過去で両想いだつたあの人には告白できる」

A氏は、高校時代を想像しタイムマシンを握りしめた。 渴巻く空間、そこにA氏は吸い込まれて行つた。

ここは過去の時代。 A氏は高校の校門で、高校生のA氏に自分が未来から来たことを説明し好きなの子に告白するように言いました。

「わかったよ。 試して告白してみる。」

学生のA氏はそう言つて告白して走り去つた。

現代に戻つたA氏。 しかしなにも変化がない。 不審に思つたA氏

は過去に戻り過去のA氏に質問した。

「なぜ告白しなかったんだ?」

それに過去のA氏は答える。

「したけどふられたんだ」

その言葉に現代へ戻り高校生の時好きだったあの子に電話で確認する。

「本当に高校生の時にぼくのことを好きだったの?」

電話の相手は答えた。

「ああ、もちろん好きだったとも。俺の友人としてな……」

なんと相手は……。

{おしまい}

タイムマシン（後書き）

感想や評価もいただいたらやる気です。もし、よかつたらお願ひします（――）

テスチャンネル（前書き）

ちょっとホラー？です。

デスチャンネル

「これは一千百年。

人命の尊さを知るために開発されたのがデスチャンネルだった。これは死に直面した人物を特殊な衛星（透視できる）が発見しテレビに映し出すものだった。しかし、救助に向かいに行く程の時間はなかった。

う氏はデスチャンネルを見ていた。

そこは、高層ビルの屋上。暗い顔をした男性が立っていた。

そしてビルより飛び降りる男性。

「彼はなぜ自殺を……」

二人目に映し出されたのはう氏の妻だった。

「なつ……」

動搖するう氏。

横断歩道の信号が青に変わり横断歩道を渡り始める妻。

『えつー!』

とそこへ信号無視の乗用車が突っ込んできた。空中を舞う妻。地面に叩きつけられて動かなくなった。事故を知つてか知らずか走り

去る乗用車。

「なんてことだ……まさかひき逃げされるとは……」

茫然自失のS氏。デスチャンネルに新たな人物が映し出された。その人物は背中を向けテレビに見入っていた。その人物の後ろ姿はS氏と酷似していた。

「ええつ！？」

腰を抜かすほど驚いたS氏は恐る恐る後ろを振り返った。

そこには振り上げられた斧と覆面の人物

〔おしまい〕

とある海岸に釣りをしている男がいた。

「おつ！」

彼の竿に当たりがきた。

喜んだのもつかの間、逆にものすごい力で海の中へ引き込まれた
男。

「うわ！ んぐ！ ……」

そして海の中で意識を失う男。

「うん！」

目を覚ます男。そこは巨大なまな板の上だった。辺りには調理器
具がいたる所に置かれていてまさに調理場だ。

「やつと目が覚めたか」

男が声の方を見ると顔は魚の頭に体は人間といった不思議な生物
が立っていた。そして不思議な生物は言った。

「今日は男の人間が釣れたぞ。『馳走だな！』

「ここは死後の世界。一つの魂（火の玉）が翼を持つ天使と会話していた。

火の玉に天使が言った。

「あなたが来世になることができるのは以下の三つの内の一つです。一つ目は貧乏な家の美男子……二つ目は大金持ちの家の超絶不細工……三つ目はランダムで選ばれる……この三つの内から一つ選んでください」

青い火の玉は言った。

「うーん。じゃあ……」

「ここは病院。一人の赤ちゃんが誕生した。それは先程の火の玉であつた。

その赤ちゃんの両親はボロイ服を着ていた。

もしや一つ目を火の玉は選んだのだろうか。

「おぎやー！」

しかし、赤ちゃんの容姿はどう、誰が見ても醜いとしか表現できない……。

なんと悲惨なランダムか……。

未来地球からの使者（前書き）

久しぶりの投稿です。感想等いただけたら嬉しいです m() m

未来地球からの使者

「ここは日本。

円盤型の宇宙船が広い公園に着陸した。そして姿を現す宇宙人。その姿は人間の男性と酷似していた。

「爆発……」

そう言つと倒れる宇宙人。

宇宙人は医療が完備された施設へと移される運びとなつたのだが宇宙人となると治療に困るしまつであった。

幸い宇宙人は軽傷だつたらしく元気を取り戻しつつあった。

各国の政府が来星目的を尋ねるが記憶喪失らしく「爆発」という言葉を口ずさむだけだった。

宇宙人が来星してから十年の月日がながれた。

ここは、宇宙人を保護している施設。あの宇宙人が記憶を取り戻し次のように叫んでいた。

「宇宙船を増設し地球から逃げだすんだ。地球が寿命で爆発するぞ！ 私は未来の地球から来た使者だつたのだ」

しかし時すでに遅く地球全土が揺れ始めた。

「おしまい」

死亡診察機

一千三十年。ここ日本で人の死ぬ日と死亡理由がわかる機械「死亡診察機」が開発され各病院に配置された。

人々は病院に押し寄せ死亡日と死亡理由を知りたがつた。

「死亡診察機」はカプセルの中に入った人物を検査し結果をだすものだった。

死亡理由が肺ガンとでたものはタバコをやめたり、人生の時間が極めて短い者は自身の預貯金をきりくずし豪遊したりした。

そんななか機械が

『死亡日、死亡理由共に不明』

と死亡診察機で解析出来ない人物が数百人も現れたのだ。機械の故障も見受けられず病院の医師や死亡診察機の作成者達もなぜのか皆目見当がつかなかつた。

立派で豪勢な家が立ち並ぶ住宅街の一つの家でソファーで寛ぐ三人の人物が会話を楽しんでいた。

「死亡診察機は診断してくれたかい？」

と夫は言った。

「いいえ、やつぱりだめだつたわ……」

残念そうな口調で奥さんは答えた。

「やはりエヌビー星人は死亡診察機では死亡日とその理由を知る」とはできなかつたか……」

なんと宇宙人は地球の社会にとけこみ生活していたのだった。

〔おしまい〕

サラリーマンであるA氏は朝八時にスーツ姿で重宝している自作の薬『仕事薬』（錠剤）を水で喉の奥へと流し込んだ。

「ううー。」

A氏はいつもベッドに倒れ込み意識を失つた。これは『仕事薬』の効用によるもので、この薬を飲むと寝ている間に自分の代わりに仕事をしてくれる便利なアイテムなのだ。

A氏でなくなつた者は田を覚まし起き上がり働きに出でいった。

夜中の八時。浴室のベットで意識を取り戻したA氏。しかし、今日はいつもと違つた。

「うう！ なんだこれわ！」

A氏の服に大量の血が付いていたのだ。

「なんで血が！ 僕はサラリーマンなのにー。」

立ち上がり足早に風呂場に向かうA氏。その晩はなかなか寝付けなかつた。

次の日の朝、A氏はここ二年飲んできた『仕事薬』を飲まず自身

で会社に行くためにスーツを着込んでいた。その時A氏の携帯電話が鳴った。恐る恐る電話にでるA氏。

「…………もしもし?」

「ああ、お前か。前回は中々の出来だった。次に殺して欲しいター
ゲットは……」

A氏は腰を抜かさんばかりに驚いた。いつの間に転職したのやら
…………。副作用がでたのかも…………。

{おしまじ}

男には好きな女がいた。とても綺麗な女性で片思いとこりやつだつた。田に田に思いは強まつていぐ。

そして男は告白することを決意した。肌寒い冬の日、男は公園に女を呼び寄せた。

女は質問した。

「用つてなあに？」

男は言った。

「えつとその…………」

そしてついに男は女に向かつて言つた。

「付き合つてください！」

それに女は少し間をおいて答えた。

「私は二十歳。あなたいくつになつたの？」

男は答えた。

「八歳です！」

{おしまい}

告白2

男には好きな人がいた。素敵な人だった。片思いといつやつだ。田に田に思いは強まつていく。

そして男は告白することを決意した。肌寒い冬の日に男は公園に相手を呼び寄せた。

相手は聞いた。
「用つてなに？」

男は言った。

「えつと、実は……」

そしてついに男は相手に向かつて言った。

「結婚してください！」

それに相手が答えた。
「無理だよ」

男は質問した。

「なぜ？」

相手は答えた。

「お互い男だから」

{ おしまじ }

男には好きな相手がいた。素敵な相手だった。片思ことこひやつだ。日に日に思いは強まつしていく。

そして男は告白することを決意した。肌寒い冬の日に男は公園に相手を呼び寄せた。

相手は静かに黙つていた。

男は言つた。

「えつと、実は.....」

そしてつにに男は相手に向かつて言つた。

「結婚してください。」

それに相手は無言だつた。

「.....」

男は質問した。

「なぜ黙つてるんだい？」

相手は答えた。

「いやー

{ おしまじ }

告白4

男には好きな相手がいた。素敵な相手だった。片思ひといつやつだ。日に日に思いは強まつていく。

そして男は告白することを決意した。肌寒い冬の日に男は公園に相手を呼び寄せた。

相手は静かに黙つていた。

男は言つた。

「えつと、実は…………」

そしてついに男は相手に向かつて言つた。

「結婚してください！」

それに相手が答えた。

「£ % # & *」

男は質問した。

「なんだつて？日本語で話してくれない？」

相手は答えた。

「私は宇宙人、人間とは結婚できません」

神様の判決

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入つて来たのは瘦せた人間の男だった。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と瘦せた男は椅子に座り机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは食料難の国に生まれ飢餓で命を落とした。そうですね」

「はい、ですから来世は食料の豊富な国に生まれたいです」

「わかりました。そうしましょう

」
「これはアメリカの農場。

そこに人間から生まれ変わった一匹のいなごがむしゃむしゃと畑を荒らし回っていました。

神様の判決2

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入つて来たのは天使とウサギだった。

天使はウサギを残して部屋から出ていきました。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様とウサギは椅子に座り机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは獵師に撃たれ食べられた。そうですね」

ウサギは言った。

「はい、ですから来世は人間を倒したいです」

「わかりました。そうしましょう」

「ここは宇宙。地球のすぐそば。そこには、千に及ぶ宇宙船があつた。

その一つの宇宙船内にウサギから生まれ変わった一体のリーダー格の宇宙人が千に及ぶ宇宙船に地球人抹殺の命令を下しましたと

〔おしまい〕

神様の判決3

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。
今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入つて来たのは織田信長だった。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と織田信長は椅子に座り机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは明智光秀に討たれ死んだ。 そうですね」

織田信長は言った。

「はい、 ですから来世は光秀を討ちたいです」

「わかりました。 そうしましょう」

「いは日本。

そこに織田信長から生まれ変わった一匹の熊が明智光秀の生まれ
変わったキツネを殴り倒し、噛み付きましたとさ。

神様の判決 4

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入つて来たのは天使と一匹の蚊だった。

天使は部屋から出て行つた。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と一匹の蚊は椅子に座り机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは生まれて初めて人の血を吸おうとして命を落とした。 そうですね」

「わかりました。 そうしましょう」

「ここは某国の病院。

そこに蚊から生まれ変わった一本の注射器が人の血液を吸つてい

ました兀。

{ むしまこと }

神様の判決5

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入つて来たのは一体の天使と一匹の肉牛だった。

天使は部屋を後にしました。

神様は言った。

「私の前まで来てください」

神様は椅子に、一匹の肉牛は立つたまま机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは肉牛として売られ食べられ命を落とした。そうですね」

「はい、ですから来世は食べる側にまわつてみたいです」

「わかりました。そつしましょ」

「ここは某国の街中。

そこに肉牛から生まれ変わった一匹の巨大な人食いの怪物が人々

を食つてこましめたる。

{ もしこ }

神様の判決 6

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。

今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入つて来たのは一体の天使だった。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と一緒に天使は椅子に座り机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは人の命を救おうとして命を落とした。 しかも人の命を救えなかつた。 そうですね」

「はい、 ですから来世は人の命を救えるようになりたいです」

「わかりました。 そうしましょう」

ここは某国の病院。

そこに天使から生まれ変わった名医が次々と人々の命を救つていましたとさ。

神様の判決 7

神様の仕事は死んだ生物の来世を決める事。今日も神様の神殿には死んだ者達で長蛇の列が出来ていました。

神様の部屋がノックされた。

神様は言った。

「どうぞ」

入つて来たのは一人の女だった。

神様は言った。

「椅子にかけてください」

神様と女は椅子に座り机を挟んで相対した。

神様は言った。

「あなたは占い師をしていたが全く当たらず、貧窮して命を落とした。そうですね」

「はい、ですから来世は当たる占いができるようになります」

「わかりました。そういう感じです」

「いは某国。

そこに女から生まれ変わったノストラダムスが預言をしていました。

逃走

一人の男は森の中を全力で走っていた。頬を汗が伝う。後ろから追っ手の気配を感じる男。

「はあはあ……」

男はさらにつスピーダを上げて疾駆する。

男の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。とても進めそうにない。男は足を止めた。

そして、男は人の気配に恐る恐る振り返った。

そこには不細工な女が立っていた。女は怒った口調で言った。

「あなた！ 初めて私のスッピンの顔を見たからって逃げることないじゃない！」

「おしまい」

逃走2

一匹の巨大な熊は森の中を全力で走っていた。後ろから追っ手の氣配を感じる大柄な熊。

熊はさらにはスピードを上げて疾駆する。

熊の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。とても進めそうにない。熊は足を止めた。

そして、熊は生き物の氣配に恐る恐る振り返った。

そこには小さな子犬がいた。大型の熊は怖がった口調で言った。

「こ、怖いから来ないでー」

犬が苦手な大柄の熊は子犬を見ながら震え上がっていた。

「おしまい」

逃走3

一人の脱獄囚の男は森の中を全力で走っていた。頬を汗が伝う。後ろから追つ手の気配を感じる男。

脱獄囚の男はさりにスピードを上げて疾駆する。

脱獄囚の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。

脱獄囚は足を止めた。

「俺もここまでか……」

脱獄囚は人の気配に恐る恐る振り返った。

そこにはラーメン屋の従業員の男が立っていた。ラーメン屋の従業員は疲れた口調で言った。

「お姫さん！ お釣り忘れてますよ！」

脱獄囚は言った。

「はあはあ、なんだ警察官じゃなかつたのか……」

{おしまい}

逃走4

一人の銀行強盗は森の中を全力で走っていた。頬を汗が伝つ。後ろから追つ手の気配を感じる強盗の男。

強盗の男はせりにスピードを上げて疾駆する。

男の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。

男は足を止めた。

「俺もここまでか……」

男は人の気配に恐る恐る振り返つた。

そこには透き通つた女が立つていた。

強盗の男言つた。

「な、なんだおまえは！？」

女は淡々とした口調で言つた。

「私はあなたの守護霊です。警察はまきましたから安心してください」

「おしまい」

逃走5

一人の男は森の中を全力で走っていた。頬を汗が伝う。後ろから追っ手の気配を感じる男。

男はさらにつスピードを上げて疾駆する。

男の顔は必死の形相だ。

森を抜けたその先は断崖絶壁の崖だった。

男は足を止めた。

「俺もここまでか……」

男は気配に恐る恐る振り返った。

そこにはなぼろい服を着た半透明な男が立っていた。半透明な男は言った。

「私は貧乏神です。私から逃げ出すことは不可能です」

男は言った。

「はあはあ、俺じゃなく他の人間にとりついてくれればいいのに……」

「おしまい」

動物会話機

博士は動物の言葉が分かる機械、動物会話機を発明した。

発明には長い年月を要した。博士もハ十五歳になつていた。

博士は飼い犬ボチに動物会話機を使いながら話しかけてみた。

博士は言つた。

「おはよつ

ポチは黙つていた。

『……』

「おかしいな？言葉は通じてるはずなのに……」

博士はめげずにポチに問い合わせた。

「気分はどうだい？」

しかし反応しないポチ。

『……』

そんな時、博士の長男が博士の部屋へ入つて來た。

「親父、犬の置物になに話してるんだ？」

ポチじゃなかつた。

（おしまい）

動物会話機2

博士は動物の言葉が分かる機械、動物会話機を発明した。

発明には長い年月を要した。博士もハ十五歳になつていた。

博士は飼い犬ボチに動物会話機を使いながら話しかけてみた。

博士はボチに言つた。

「おはよつ

ボチは言つた。

『おはよつ』

「おおー、言葉が通じたぞー!」

博士はボチに問いかけた。

「気分はどうだい?」

ボチは言つた。

『あんた、最近調子にのつてるだろ。立場は私の方が上よー。』

博士はボチの言葉にへこんだ。

{おしまじ}

動物会話機③

博士は動物の言葉が分かる機械、動物会話機を発明した。

発明には長い年月を要した。博士もハ十五歳になつていた。

博士は飼い犬ポチに動物会話機を使いながら話しかけてみた。

博士はポチに言つた。

「おはよつ

ポチは言つた。

『おはよつ』

博士は言つた。

「おおーー 言葉が通じたぞーー！」

ポチは言つた。

『おおーー 言葉が通じたぞーー。』

博士はポチに問いかけた。

「わしのまねをしているのかい？」

ポチは言つた。

『わしのまねをしているのかい？』

博士は怒つてポチに言つた。

「なぜわしのまねをするんだい？」

ポチは言った。

『なぜわしのまねをするんだい？』

それから一時間ほど博士とポチのやり取りは続き根負けした博士はポチと話すのを止めてしまった。

どうやらポチの性格は捻くれ者なのだ。

《おしまー》

動物会話機 4

博士は動物の言葉が分かる機械、動物会話機を発明した。

発明には長い年月を要した。博士も八十五歳になっていた。

博士は飼い犬ボチに動物会話機を使いながら話しかけてみた。

博士はボチに言った。

「おはよつ

ボチは言った。

『おはよウ』

博士は言った。

「おおーー 言葉が通じたぞーー！」

ボチは言った。

『喜んでもらえて幸いです』

博士はボチに問いかけた。

「気分はどうだい？」

ボチは言った。

『心臓が苦しいです』

博士はボチに言った。

『なに？ 心臓が苦しいだと』

ポチは言った。

『はい……』

それから動物病院にポチを連れていった博士。獣医によると心臓の病気にかかっているとのことで手術が決まった。

動物会話機が初めて役に立った瞬間であった。

〈おしまい〉

刑事は一人、犯人を追つていた。

犯人の隠れ家を遂に見つけ、張り込んでいた。
遂に突入の時、刑事に緊張がはしる。

蹴り開けたドア。拳銃を構える。

刑事は言った。

「大人しく、手を挙げろ」

しかし建物内に人の姿はなかつた。

そのかわり机の上に置き手紙があつた。そこには以下のように書
かれていた。

『あなたへ

私を捕まえようと躍起になり、このアジトがばれたのもわかつて
います。料理を作つておいたので温めて食べてください。いつまで
も愛しています。

妻より

〔おしまい〕

刑事は一人、犯人を追つていた。

犯人の隠れ家を遂に見つけ張り込んでいた。
遂に突入の時、刑事に緊張がはしる。

蹴り開けたドア。拳銃を構える。

刑事は言った。

「大人しく、手を挙げろ」

建物内には一匹の熊がいた。

驚く刑事。

「な！」

熊が立ち上がり襲い掛かってきた。拳銃で応戦する刑事。

なんとか熊を追い立てるに成功した。

部屋には置き手紙があつた。内容は以下の通りだ。

『札付きの悪より

この手紙を読んでいるということは俺が捕まえた熊を倒したとい
うことだろう、流石は俺のライバル……』

そのさきは血に汚れて読めなかつた。

部屋から、壊れた檻と犯人の死体が見つかった。どうやら熊に食

べりてじつめたまつだ。

} おじい

刑事は一人、犯人を追つていた。

犯人の隠れ家を遂に見つけ張り込んでいた。
遂に突入の時、刑事に緊張がはしる。

蹴り開けたドア。拳銃を構える。

刑事は言った。

「大人しく、手を挙げろ」

建物内には同じ顔の男が三人いた。

驚く刑事。

「な！ 整形手術か！？」

右端の男達は言った。

「人相の悪い男に整形手術をうけらされまして」

真ん中の男は言った。

「俺はなにも悪いことはしていない」

左端の男は言った。

「俺は犯人じゃない」

刑事は言った。

「三人とも警察署まで来てもらおう」

犯人は簡単に分かつた。顔は変えられても指紋までは無理だった
ようだ。

時間よ止まれ

長年の研究の末、博士は時間を止める腕時計を開発した。

「やった、ついに出来たー。これで私は大金持ちだー。」

博士は試しに腕時計の時間を止めるスイッチを押した。

「…………」

時間を止める腕時計はついで博士の時間も止めてしまった失敗作
だったよつだ。

止まってしまった時間が動き出すかは定かではない。

{おしまご}

時間よ止まれ²

長年の研究の末、博士は時間を止める腕時計を開発した。

「やつた、ついに出来た！ これで私は大金持ちだ！」

博士は試しに時間を止める腕時計のスイッチを押した。

「街へでてみよう」

「ここは人で賑わうストリート。しかし人間達はぴくりとも動かない。」

博士は言った。

「実験は成功だ！ 時間を元に戻してみよう」

博士は時間を元に戻すボタンを押した。

しかし、ストリートの人々は固まつたままだ。

「なぜだ！？ ここ！」

博士は何度もボタンを押したが変化は現れなかつた。

博士は呟いた。

「そんなん……これからは地球でたつた一人で生きていいかないといけないのか……」

《おしまい》

時間よ止まれ③

長年の研究の末、博士は時間を止める腕時計を開発した。

「やつた、ついに出来た！ これで私は大金持ちだ！」

博士は試しに時間を止める腕時計のスイッチを押した。

「街へでてみよう」

「ここは人で賑わうストリート。しかし人間達はぴくりとも動かない。」

博士は言った。

「実験は成功だ！ 時間を元に戻してみよう」

博士は時間を元に戻すボタンを押した。

しかし、ストリートの人々は固まつたままだ。

「なぜだ！？ ここ！」

博士は何度もボタンを押したが変化は現れなかつた。

博士は呟いた。

「そんな……これからは地球でたつた一人で生きていかないといけないのか……」

「そんなことないわよ」

「一。」

博士が声の方を振り向くと一人の女が立っていた。

博士は言った。

「なんで動けるんだー!?」

「私が悪魔だからよ。人間の作ったものなんかの影響は受けないわ」

「目的はなんだ」

「ただの暇つぶしよ。私がその時間を止める機械を治してあげましょうか?」

「できるなら頼む!」

「ただし、あなたの時間を数年いただくわ」

「わかった、頼む」

悪魔はなにやら呟いた。

「さあ、治つたわよ」

「すまない、ありがとう」

博士は時間を動かすボタンを押した。

時間は動き出した。

ある街のストリートに腕時計のボタンを押したまま固まっている博士の姿があつた。

悪魔は言った。

「三年間あなたの時間を止めらしてもうつむ。キヤハハハハハ」

{おしまこ}

時間よ止まれ4

長年の研究の末、博士は時間を止める腕時計を開発した。

「やつた、ついに出来た！ これで私は大金持ちだ！」

博士は試しに時間を止める腕時計のスイッチを押した。

「街へでてみよう」

「ここには人で賑わうストリート。しかし人間達はぴくりとも動かない。」

博士は言った。

「実験は成功だ！ 時間を元に戻してみよう」

博士は時間を元に戻すボタンを押した。

すると街の人々は動きだした。

博士は言った。

「よし、完璧だ」

「ちょっとすいません」

博士は声の方へ顔を向けた。そこには黒いスーツの男が立っていた。

「なんだい？」

「あなたはビックリ大変な機械を作ってしまったよ！」

「だれだ！？ 田的是なんだ？」

「未来の警察ですよ。そんな未来を変える力のある機械を見逃すわけにはいかないな」

未来の警察は指を鳴らした。すると博士の時間を止める腕時計は砂に変わった。

「な！？」

「悪いですがこれが仕事なものでね」

そう言つと黒いスーツの男は姿を消した。

後に残されたのは悲しみにくれる博士であった。

{おしまい}

大一郎は言った。

「君みたいな女性は一度どじめんだ」

理香は言った。

「それはこっちの台詞よ。あなたみたいな人は嫌よ」

「せうかい、なら離婚しよう」

「のぞむところよ。それと今回の離婚の理由はあなたの浮気にあ
るんだからね」

「それはわかつているよ。でも前回の離婚の理由は君の浮気のせい
じゃないか」

「それを言つなら前々回の離婚の理由はあなたの浮気よ」

一十回の結婚と十九回の離婚を繰り返している両者、今後どうな
るのやら。

{おしまじ}

「こゝは芝居小屋の一室。

大二郎の頬に健二のパンチが炸裂した。大二郎が鼻血をながしながら健二に飛び掛かかった。そして仰向けの健二に馬乗りになつて両手で健二の首を絞め始めた。

大二郎は言った。

「よくも俺の女を寝とつたな」

健二は苦しそうに息をしている。

その部屋に猿の調教師と精神科医が入つて來た。

精神科医は言った。

「大二郎さん、あなたの奥さんは一年前に交通事故で亡くなつたんです。いい加減受け入れてください」

猿の調教師も言った。

「大二郎さん、健二は猿なんですからあなたの奥さんが生きていても浮氣なんてしませんよ」

{おしまい}

当たり屋

月が空を支配する夜9時。閑静な住宅街の道で一人の男が車にしきれ倒れた。

男をひいた神崎さんは車から下り倒れた男に駆け寄った。

神崎さんは言った。

「だ、大丈夫ですか？」

しかれた男は言った。

「ええ、なんとか……」

「感謝料は払います。救急車は呼びますか？」

「感謝料はけつこうつです。救急車も呼ばなくて大丈夫です。そのかわり……」

「なんですか？私に出来る」としたらなんでもおっしゃつてください……」

「実は神崎さん……」

「な、なんで私の名前を知ってるんだ。うん？ よく見ると娘の彼氏じゃないか」

神崎さんは娘の彼氏をよく思つてなく結婚にも反対だった。

しかれた男は言った。

「さつき、私に出来る」としたらなんでもおっしゃつてください」と言いましたね……」

「だったらなんだと言つんだ？」

「僕に娘さんをください……」
「おじまい」

大一郎は夢を見ていた。その夢は以下の通りだ。

ナイフを持つ殺し屋が大一郎に凶器を向け言つた。
「悪いが死んでもらう」

「待て金なら払う！」

「いくら払える？」

「金庫に一千万ある。どうだ？」

「残念だが私が貴様を殺して貰える報酬は一千万だ……死ね！」

殺し屋は大一郎の腹にナイフを深々と突き刺した。

そこで大一郎は目を覚ました。腹部に激痛を覚え目をやるとナイフが深く突き刺さっていた。

大一郎の意識は遠のいていった。

（刺されたのは夢じゃなかつたのか……）

{おしまい}

時間よ戻れ

科学者は時間を戻す置き時計を完成させた。戻すだけで他に機能はない。

科学者は試しに時間を戻すスイッチを押した。

すると凄いスピードで時間が巻き戻つていった。

科学者は赤ちゃんになり、そして消えてなくなり。

科学者の家も無くなり、木々が生い茂った。そして恐竜達が跋扈する時代になつた。

その時、ティラノサウルスの足が時間を巻き戻す時計を踏み潰した。

やつと一巻き戻しが止まつた。

効力が強すぎたようだ。

{おしまい}

少年は通学路を歩いていた。するとそこに扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだつた。

少年は好奇心を擗られた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには怪しげな部屋があり机の上の水晶玉を椅子に座り覗き込む老婆の姿があつた。

老婆は言つた。

「勇者様。ようこそおいでになられました」

少年は中に入つて扉を閉めた。少年は言つた。

「あなたは誰ですか？」

「私は王宮使えの魔法使いです。どうか、この世界を救つてください」

それから少年の異世界での大冒険が始まるのでした。

（おしまい）

少年は通学路を歩いていた。するとそこには扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだつた。

少年は好奇心を擗られた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには机に肘をつき、椅子に座つた恐ろしげな男がいた。

少年は扉を閉め中に入つた。

恐ろしげな男は言った。

「私は閻魔だ。死者でない者がなんのようだ?」

少年は扉のことを話した。

閻魔は言った。

「なんと! 人間の世界と繋がつているだと!」

「はい」

「よく、教えてくれた。褒美にお前に一度だけ現世で悪事をしても天国に送つてやろう!」

少年は現世で仲が悪かつた不良を殴つたそつた。

「おしまい」

少年は通学路を歩いていた。するとそこに扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだつた。

少年は好奇心を擗られた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには広い草原が広がっていた。

少年は扉を閉め、また開いた。

するとそこには大海原が広がっていた。少年は波に引き込まれてしまつた。

そして扉は閉まつた。

その後、少年の行方を知る者はいなかつた。

〔おしまい〕

少年は通学路を歩いていた。するとそこには扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだった。

少年は好奇心を擗られた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには肉食の恐竜がいた。

少年は急いで扉を閉じようとしたが噛み付かれててしまった。少年は暴れたが最後は飲み込まれてしまった。

そしてひとりでに扉は閉じた。

「おしまー」

少年は通学路を歩いていた。するとそこに扉はあった。少年は道の真ん中にある扉に驚いたが他の通行人達には扉は見えていないようだつた。

少年は好奇心を擗られた。この扉の向こうにはどんなものが待ち受けているのかと。

少年は遂にドアノブに手をかけた。回し押し開くとそこには一体の神々しい天使が立つていた。

天使は言った。

「あなたにはこの扉が見えたのですね？」

少年は言った。

「はい」

「では天国へ行きましょう。この扉が見える人を連れていいく」とこなっています」

それ以来、少年の姿を見た者はいなかつた。

〔おしまい〕

あるといつておられたると有名な占い師がいました。
サコツセミナの占い師で、おひるひこました。結果は以下の通りでした。

「パンキが近づいてくるでしょう」

サコツさんは言った。

「婚期！」

サコツさんはたいへん喜んで帰路に着きました。

それからのサコツさんは仕事が忙しくなり、婚期が近づいてきた様子はいつにでもうわれません。

「婚期が近づいている様子なんて全くないわね。最近は忙しくて根

気がいる仕事ばかりね！」

ふとサコツさんは気がついた。

「あ、まさか、婚期……パンキ……根気……」

{おしまい}

戒(じまし)め

俺にはじまなことがあつても守りねばならぬ戒めがある。どんなことがあらうが戒めを守らねば大変な惨事にみまわれてしまつ。

ほんの少しの油断がどれほど苦しみを俺に与えたことか。

「やべ会社に遅刻する。でもトイレに行きたい

俺は時間に追われながらも公園のトイレに駆け込んだ。

俺は尿を全て放出し、ホッとしていた。その時、俺の脳裏を会社に遅刻してはいけないとよぎつた。

俺は性器をしまつのを忘れチャックを上げた。

「ぐわあーーーー！」

戒めを忘れていた瞬間だつた。皆様も「用心を。

{ おじまー }

もし三人いたら

最初の人間はアダム（男）とイヴ（女）とソラ（男）の三人いた。

禁断の果実を食べ三人は変わった。

三人の内一人はを愛する相手めぐつて殺しあいを始めたのだ。

その戦いは三人の内一人が愛し合つた結果、一対一の戦いに変わつた。

ついに三人の内一人が死んだ。愛し合つた一人が勝つた。愛の力が勝利をよびこんだのだ。

勝つた愛し合つている一人は喜び抱き合つた。そして激しいキスをかわした。

生き残つた一人は言った。

「愛してるわアダム（男）」

そして生き残つたもう一人も言った。

「愛してるよソラ（男）」

一人はホモだったのだ。

告白

「付き合ってください！」

風が涼しい秋の昼間。公園でスボーツ刈りの前田健介は告白した。
相手は容姿が非常に整った白井由利だ。由利は驚きを口にした。

「あなたも私と付き合いたいの？」

健介は驚いた口調で言った。

「え、誰か他の人からも告白されているのかい？」

「ええ、そうよ」

健介は気になりさらに質問した。

「なんていう男だい？」

「えとね……さわい「わい」沢井孝司さんでしょうう……それから……」

「それからって一人じゃないのかい？」

「ええ、そうよ。……それに大橋大一郎さんでしょうう……それに泥ひ谷大介さん……それと……」

困惑した健介は聞いた。

「いったい何人の男性から告白されてるんだい？」

由利は普通の調子で言った。

「今日だけで、あなたでちょうど百人目よ」

「おしまい」

飲む者

私は飲んでいる。とても美味しい味がする。飲む時はばれないよう
にこつそり飲む。なんともいえない緊張感がたまらない。私はひそ
かに飲むのが上手な方で、まだ飲んでいたところを見つかったこと
はない。明日も飲みに行こう。

連れだって飲みにいくこともある。その時はお互い慎重に慎重を
重ね飲みに行く。飲んでいるところを見つかると殺されても文句も
いえない。仲間が殺されることなんてざらにある。飲むことはとても
も危険なことなのだ。

今日は煙りで目眩がする。どうやら人間達が蚊取り線香をたいて
いたようだ。わたしはついには意識を失った。

〔おしまい〕

彼、前田賢太はとても運の悪い男だった。というのも小さな不運は、よく箪笥の角に足の小指をぶつけるのだ。当たらないように意識していくもぶつけてしまう。彼にはどうすることも出来なかつた。

また、大きな不運はよく雷に打たれて死にそうになることだ。今まで両の手で数えられないくらい落雷をくらつていて。幸い命には別状はなかつた。だが大変な痛みを伴つた。これからも雷に打たれることだろう。それを考えると死んでいた方が幸せだつたかもしれない。

そしてまた、前田賢太に新たな不幸が迫つていた。それはご機嫌ななめな、このストーリーを書いている作者のまの手だ。作者の悪意は前田賢太を襲つた。

前田賢太は公園で子供が掘つた、深さ一メートルほどの穴に落ちて命もおとしましたとさ。

{おしまい}

ここは崖つぶち。一人の女が三人の男に囲まれていた。女の後ろには大海原が広がっていた。

三人の男の内、筋肉隆々の男が言った。

「お嬢さん、盗み出した核弾頭の発射装置を渡せ！」

「嫌よ！」

別の細い男が女ににじり寄ろうとした。すると女は鞄からなにやら手乗りサイズの機械を取り出した。田鼻立ちが整った肌の白い女は言った。

「これが核弾頭の発射スイッチよ」

男達は慌てた様子をみせる。筋肉質の男は言った。

「待て！ はやまつたことを考へるんじゃねえ！」

女は残酷な笑みを見せ言った。

「いのなつたら、やけつぱけよ。えい！」

女は核弾頭の発射スイッチを押した。緊張がはしる。

映画監督が言った。

「はい、カットー！ 四人共良い演技してたよ

スタッフが演技をした四人にジュースを渡しながら言った。

「核弾頭のスイッチ、押さなかつたよね」

「あ、押しちゃいました……」

「なんてことを！ リアリティを出すために本物の装置を借りてきましたから押すふりだけつていったのに……」

「ここは某国。核弾頭が飛来、爆発し何万人もの犠牲者をだした。

「おしまい」

渡せーー！

日が暮れて夜になつた。月が眩しく輝いている。今は肌寒い冬。ここは某国の公園。そこで男と女が怒鳴りあつていた。厚手のコートを着た男は言った。

「渡せーー！」

厚手のドレスを着た女は言い返した。

「なにをよー サイは強盗！？」

男は詰め寄りながら叫んだ。

「いい加減渡せーー！」

女は段々怖くなつて言った。

「あんたは何がほしいのよー！？」

男は女にさらに近づき叫んだ。

「渡さなければ奪い取るぞーー！」

女は相手の男をいかれた強盗だと思い鞄をできるだけ遠くに投げた。

「欲しければあげるからとひときわなさこよ」

しかし男は鞄に見向きもせず白黒のよつた肌の女に言った。

「渡せー！」

男は女に走りよつて來た。その時男の顔に月明かりが当たつた。女は迫り来る男の顔を見て絶叫した。男の顔には目や鼻や口、眉が無かつたのだ。

男は女を押し倒し女の顔を掴んで言った。

「お前の顔渡せー！」

{おしまい}

地球最高

前田孝志まえだたかしは眠っていた。ここは彼の夢の世界。そこは青々と茂った森を円形に切り取った公園だ。公園のベンチに腰掛けた孝志は羽が背中から生えた人と話をしていた。羽が生えた人は自分は天使だと名乗つた。

天使は言った。

「孝志さんあなたを地球最高の人間にしてあげましょう」

孝志は言った。

「地球最高？」

「そうです。では」機嫌機嫌よう

孝志は自室のベットで目覚めた。外から叫び声が聞こえてきた。孝志はパジャマのまま外にでた。すると巨大な宇宙船が人間達を地上から吸い上げていた。次々に吸い込まれていく人々。ついには孝志一人が地球上に残された。

夢は正夢となり孝志は地球最高の人間になつたのだった。

〈おしまい〉

「さて何を書こうかな」

小説を書こうとパソコンに向かう太田敬一郎^{おおたけいっしゃろう}。彼の部屋は大量の本で溢れていた。

「……」

敬一郎はパソコンをカタカタと操り文章を書いていく。次々に生まれる文。なかなか作成スピードが速い。

「……」

敬一郎には好きな女性がいた。名を貞子^{じだい}といつ。二人の馴れ初めは保育園時代、敬一郎が悪口を言われる貞子を庇つたことだ。

(……苛々する)

一人の仲の良さはおりがみつきで週に一回はデートをしていた。今週はショッピングに連れだってでかけ、気にいった服を購入していた。その後は中華料理屋で食事を済ませホテルに

「さつきから煩いぞ作者！ 人が小説を仕上げてる最中にこりゃこりゃと！ 集中できねえじゃねえか！」

「あ、すいません。どうやら聞こえてたみたいですね。では、今田さんのへんでさよなら。

慌ただしく走り回る選挙用車両。開いた窓から立候補者が手を振つていて。箱型の長めの車両のスピーカーから言葉が発せられた。

「前田大一郎です。前田大一郎をよろしくお願ひいたします」

ついに議員を決める選挙の日がやつてきた。何十億人の人が選挙に参加した。選挙の候補者は二人。一人は日本人の前田大一郎さん、もう一人はアメリカ人のエドワード・ニューゲートさんだ。

そしてテレビで開票速報がながれる。二人の得票数は肉薄していなかなかどちらが有利とも言えなかつた。

ついに全ての票が出揃つた。勝つたのはエドワード・ニューゲートさんだ。エドワード・ニューゲートさんはテレビにでた。家族と喜びあつたり支援者と握手をかわしていた。

テレビのアナウンサーは言つた。

「宇宙議員地球地区に選ばれたのはエドワード・ニューゲートさんです」

今は西暦三千百年。宇宙が統合された、そんな時代。

「おしまい」

大きな願い

季節は初春。山田和子は家の台所で冷蔵庫から取り出した卵をまな板の上に置いた。すると白い艶のある卵は揺れ始め、所々にひびがはいりついには卵のからを破つてなにかが現れた。卵の中から姿を現したものは十センチぐらいの小さな人で背中に翼があり頭の上に黄色く輝くわっかを持っていた。

和子は大いに驚きながらも言った。

「あなたはなんなの？」

小さい人は言った。

「私は生まれたばかりの天使です。そんなことよりあなた何か願い事ないですか？」

「願い事？」

「そうです。私達天使は大きな願い事を叶えると大きく成長できるんです」

「じゃあ私を日本一のお金持ちにしてよ」

「願いが小さくて駄目です。もつと大きな願いにしてください」

「え……じゃあ世界一の富豪にして」

「まだまだ小さいです」

「そ、それなら宇宙一のお金持ちにして！」

「わかりました。どうぞ！」

天使はそういうと姿を消した。
そして空から和子の家に向かつて長さが十メートルはあろうかと
いう分厚い札束が何万個も降り注いだ。潰れる和子の家。和子の生
死は定かではない。

先程の小さかつた天使は大人の男性と同じぐらいのサイズになり
空を舞っていた。天使は言った。

「貨幣価値が最も高い純金を含む、巨人が住むハムラビ星の札束は
人間にはちょっと無理だったかな」

「おしまい」

三月一日

大一郎氏は会社からの帰宅途中に道端で一冊の手帳を拾つた。
「未来手帳?」

大一郎氏は表紙を読み手帳を開いた。

一ページ目には以下のように書かれていた。

『この手帳の未来の日に何かを書き込めばそれが現実になる……』

「まさか……」

大一郎氏は鞄に未来手帳をいれ帰路についた。

三月三日 夜

今は夜。大一郎氏は自宅のアパートで未来手帳に向き合つていた。
「暇つぶしに……」

大一郎氏は適当な気持ちで未来手帳に以下のように書き込んだ。

『三月四日』

課長に昇進する

「なつたらな。なんてな。そろそろ寝るか……」

三月四日(

大二郎氏は会社に出勤した。そして通路の掲示板の周囲にちょっとした人だかりができていて、ことを知り近づいていった。

「大二郎さんよ

「ホントだ」

大二郎氏は掲示板に貼られた紙を目にした。

『辞令

山本大二郎 営業二課 課長に昇進』

大二郎氏は驚きから声がでなかつた。

三月四日 夜(

「やつたぞ！ 俺はすごい物を手に入れた！」

大二郎氏はアパートで大騒ぎしていた。

「ハハハッ！ 未来手帳を使えば社長にだつてなれる！ いや、待てよ…… そうだこつしよつ！」

未来手帳に大二郎氏は次のように書き記した。

『三月五日

神様になる』

三月五日 早朝

「おい神よ！ 田を覚ませ！」

「うんつ？」

眠りから覚めた大一郎氏は布団から出て立ち上がり聞いた。
「……天使さんですか？」

「そうだ天使だ」

「私は神様になつたのですか？」

「そうだ。だから私がここにいる」

大一郎氏は布団の上でガツツポーズを決めていた。
(やつたぞ！ 全ての頂点、神様になれた！ しかし、それにして
は天使の態度が不自然なきが……)

「私は神様になつたのでしょう。それなのに天使さんの態度はどう
いった理由で？」

天使は未来手帳を机から取り上げながら答えた。

「この世の順位は第一が天使。第一が全ての生物。最下位に位置す
るのが天使の使いである神だ」

それを聞き驚き、崩れ落ちる大一郎氏。しかし、未来手帳を思い
出し天使につめよる。

「その手帳を返してください！」

「駄目だ。これは私がいただく。神のくせにえりもつそつだぞー。」

「そんな……」

世界の頂点に立つはずだった大一郎氏は真逆の立場に……。

{おしまい}

秋の清涼とした風が吹く十月。家畜小屋の中で値段交渉が行われていた。買い手は言った。

「まるまると太っていて身が詰まつてこゐるやうだ。一匹あたり一十
ぐらいで売つてくれないか？」

家畜の売り手は言った。

「一十はひどい。せめて一匹あたり三十五にしてもらいたいんだが」
買い手は言った。

「七十四匹買つから一匹あたり一十五にしてくれないか

売り手は言った。

「七十匹買つてくれるなら一匹あたり一十七で売るわ。どうだらう
か」

買い手は言った。

「わかつた。七十匹で一匹あたり一十七で買おう

売り手は言った。

「商談成立だな」

その時家畜の一匹が言った。

「嫌だ、まだ死にたくない！」

他の家畜も言った。

「俺も死ぬのは嫌だ！」

売買されていた家畜の正体は人間だったのだ。そして地球は宇宙人に占領されていたのだった。

〔おしまい〕

クレーム1

「貴社のチーズが腐つて変色していましたぞ!」

「まい」と申し訳ありません

「おたくの牛乳、酸っぱい味がしましたわよ!」

「まい」と申し訳ありません

「君のと!」の練乳苦くて駄目だよ!」

「まい」と申し訳ありません

上記のように株式会社 のクレーム対応課は大忙し。一日に数百件の苦情が寄せられる。椅子に腰掛け電話対応に追われていたデル・スマスは少しの間をみつけコーヒーメーカーでコーヒーを入れ自分の席に戻った。するとデルの机の上の電話が鳴り響いた。うんざりしながら受話器をとる。

「はい、株式会社 です」

「あなたがたの会社ではサービスといたずらをされてますのか? は? サービスといたずらですか?」

「ええ、牛乳の中に指輪が入っていましたの」

「いえ、多分!」からの!スマスです。すいません。それがサービスのほうですか?」

「アリス」

「では、いたずらの方ばかりだったのですか?」

「輸送用の箱がついてました」

「おじさん

クレーム2

「貴社のチーズが腐つて変色していたぞ！」

「ま」と申し訳ありません」

「おたくの牛乳、酸っぱい味がしましたわよ！」

「ま」と申し訳ありません」

「君のと」の練乳苦くて駄目だよ！」

「ま」と申し訳ありません」

上記のように株式会社 のクレーム対応課は大忙し。一日に数百件の苦情が寄せられる。椅子に腰掛け電話対応に追われていたデル・スミスは少しの間をみつけコーヒーメーカーでコーヒーを入れ自分の席に戻った。デルは仕事だが度重なるクレームにいらいらしていた。デルは受話器を取り適当に電話番号を押した。すると相手がでた。

「はい、もしもし……」

デルは溜まつたストレスを発散するように言った。

「グリース大統領の馬鹿野郎！ グリース大統領の能無し！ この役立たずが！」

「なんだと！ お前はどこの誰だ？」

「株式会社 に勤めるデル・スミスだ！ お前こそ誰だ？」

「私は現大統領のグリースだ」

「え！？」

「株式会社 のデル・スミスだな、どうなるか覚えていろよ！」

翌日の朝、散歩中の老人が砂浜を歩いていると変死した死体が発見された。すぐ側に財布と免許証が落ちていた。免許証には……デル・スミスと書かれていた。

△おしまい△

ブラックジョーク1

「映画館で」

男「リアルな映画だなー。あのライオンなんか画面から飛び出しているよつじやないか」

アナウンス「お客様方！ ライオンがこの映画館に侵入しました！ 急いで逃げてくださいー！」

「食卓で」

子供「ママ、この焼肉変わった味がするね」

母親「そうよ。なんせアメリカ産なんですよん」

子供「最近、ママに言いつけてくるアメリカ人のチャーリーさん見かけないね」

母親「ええ、もしかしたら誰かに食べられていたりしてね」

「電気を消した食卓で」

男A「さて、みんな鍋をはじめよ。ルールは取った食材は必ず食べる」と

女A「じゃあ私からいくわね。うん？ なにこれ、手足が五本ある生き物？」

男B 「あ、」¹⁾めん調理中に手を切り落としかやつたら

「公園で」

男の子A 「お医者さんいりつけ」

男の子B 「ここよ。つてなんで包丁持つてるの?」

男の子 「手術しようと思つて」

「おつかれ」

ブラックジョーク2

「事務所で」

ヤクザ「借りた金を返して貰おつか?」

男「すいません。あと一週間だけ待つてください」

ヤクザ「なんだ、返すあてがあるのか?」

男「いえ、夜逃げするんです」

「美術館で」

夫「この裸体画、どことなくお前に似てるな」

妻「あら、分かった。実は私がモデルなの」

夫「しかし、それにしてもスタイルが良すぎないか?」

「写真展で」

男「この夕日の写真が綺麗だろ。だるま夕日っていうんだぜ。俺のお気に入りの写真なんだ」

女「あなた、それ本物のだるまよ」

男「え？」

「料理店で」

客「この本日限定獅子人なべって何？」

店員「はい、それはライオンの肉と人の肉を使った料理です」

客「へー、珍しいね。ライオンの肉なんかどうやって仕入れたの？」

店員「動物園から逃げ出したライオンを店長が命を捨てて捕らえたんです。人の肉の方はライオンに噛まれて死んだ店長の肉です」

「おしまい」

ブラックジョーク3

「結婚式場で」

来賓「あなたが新郎さんですか？」

新婦「いいえ！ 新婦です！」

「のろいのプリンター」

「あなた知ってる？ のろいのプリンターって」

「え、呪い？ 恐そうね。でも聞きたいから続きを教えて」

「そのプリンターを使つとね……」

「使うと？」

「仕上がるまで……とても鈍いのよ」

「路上で」

ドライバー「へい、彼女。俺とデートしないかい？」

美女「おじいさん、あなたがあと五十歳若かったらね

「庭で」

母親「坊や、庭の木にくくりつけたロープで遊ぶのは止めなさい!」

坊や「えー、昨日パパだって動かなくなるまで首を吊つて遊んでたよ」

「警察署で」

醜い女「恋人の彼が忽然と姿を消したんです」

警官「そうですか。あなたの顔を見ていると彼の気持ちが分かります」

「おしまい」

フラックジョーク4

「高台で」

女「綺麗な景色ね。遠くまで見えるわ」

男「そうだね。素晴らしい景色だ」

女「私も遠くへ行つてみたいわ」

男「ここから飛び降りると、とても遠くへ行けるよ」

「丘の小屋で」

占い師「あなたの顔に死相がでています!」

密「そうだろうね」

占い師「なんでそんなに落ち着いているんですか?」

密「僕は昨日、車に敷かれて死んだばかりだからね」

「海岸で」

男「珍しいな、あそこセイウチがいるよ」

女「違うわ。寝転んだ、ただの太つたおばさんよ」

「浜辺で」

男「僕とおき合つてください。」

女「いいわよ。えい！（肘で男を突く）

男「いた！ 何をするんだ？」

女「え？ 突きあつんでしょう」

「おしまい」

ブラックジョーク5

「図書館で」

婚約者（女） 「何を読んでるの？」

婚約者（男） 「白紙の本を読んでるんだ」

婚約者（女） 「何が面白くてそんな書物を読んでるんの？」

婚約者（男） 「友達が言つには、じーっと見ていると文字が浮かび上がるらしいんだ」

婚約者（女） 「……からかわれたんじゃないの？」

婚約者（男） 「うん！ 浮かびあがつたぞ」

婚約者（女） 「なんて？」

婚約者（男） 「婚約は白紙だつて……」

「台所で」

妻 「あなたは、運命信じてるんじょひ？」

夫 「ああ、そうだよ」

妻 「魚をさばいてたらお腹から離婚届けが出てきたの……離婚してくれる？」

「結婚式場で」

来賓「奥さん綺麗ですね」

新郎「そうかい、ありがとう」

来賓「着ていいドレスがね」

{おじまー}

ブラックジョーク6

「庭で」

お隣りさん「きねを持っていますね。もちつきですか?」

男「いえ、寝ている妻を叩いて……」

「新年会で」

男A「今年の抱負はありますか?」

男B「不倫は三人までにする! ですかね」

「忘年会で」

女A「今年、何か嫌なことあつた?」

女B「姑がね……」

女A「なに?」

女B「百十四歳なのに元気満々なのよ」

「会議で」

社長「私は最近餅まきをしてみたくてね」

幹部「はあ」

社長「もひすくボーナスの時期だよね」

幹部「そうですね。それがなにか?」

社長「次のボーナスは屋上から金まきにしようが」

「おしまじ」

ブラックジョーク7

「記者会見で

重役「今日は汚水でたいへんな」迷惑をおかけしまして……」

キャスター「汚水? 今日は発明品の発表記者会見ではないんですね?」

重役「しまった!」

「家で」

?「僕と結婚してください」

女「無理よ」

?「なぜですか?」

女「あなたがオウムだからよ」

「川で」

少年A「少年Cはバタバタとバタフライで泳いでるね

少年B「違う! あれは、バタバタとおぼれてるんだ。早く助けないと!」

「城で」

兵士A「お姫様！ こんな夜遅くに遊びでいらっしゃっては困ります」

姫「もう、わかつたわよ（部屋の中に入る姫様）」

兵士B「兵士A、なんで大きな声をだしてるんだ？」

兵士A「姫様が夜遊びをされていたので注意していたんだ」

兵士B「姫様？ 国王には王子様だけしかいないぞ」

「おしまい」

フラックジョーク8

「寝室で」

夫「ちよつと… 妻のいびきがつるるべて眠れないよ…」

妻「私だつてあなたのいびきで寝てないわよ…」

夫「え？ 僕はまだこすこもしてないよ」

妻「私も寝てないわよ」

夫「じゃあ、たつきのいびきは？」

犬「グー！ グググー！ グガガー！」

「不思議な世界で」

女の子「美しいお花畠、かわいらしげちょいちょ、流麗な小川、雄
々しい山々……」にはどいかしら？」

老人「（川のむこうをしから）こつちくおいでー、天国へおいでー」

女の子「あー、おじいちゃん！」

老人「うんー、奈津子かー、こつちへ来たら駄目だー！」

「会議で」

社長「不景気を乗り越えるいいアイデアはないかね」

社長以外の会議参加者達「社長がおやめになられたら……」

「星空の下で」

女「あ、流れ星……」

男「ほんとだ。でもこっちに落ちてきでないか?」

女「さや——」

{おしまい}

ブラックジョーク9

「病院で」

患者「いつになつたら退院できますか?」

医者「さあ、わかりません」

患者「なんで退院できる時期がわからないんですか?」

医者「あなたがいつ亡くなるかわからないからです」

「豪邸で」

夫「今日釣りに行ってただる。そこで海老で鯛を釣つたんだ」

妻「私も海老で鯛を釣つたことがあるわよ」

夫「へえ、そうなのかい」

妻「実はね、整形手術をしてあなたを釣りあげたの」

「消防署で」

隊員A「S地区で燃え上がつてゐるらしいぞ」

隊員B「火事だね!」

隊員A「いや、奥さんが浮氣をした旦那さんに火がでるほど怒って
るらしいぞ」

「観光地で」

夫「立派なお城だね」

妻「ええ、そうね。一度でいいからお姫様になつてメイドに命令してみたいわ」

夫「いつも命令してゐるじゃないか。俺にああしや、こうしやつて」

「おしまい」

ブラックジョーク10

「道場で」

男A「たのもー！」

師範「さては道場やぶりだね」

男A「看板は貰つていくぞ！」

師範「よからう私が相手になろう」

男A「もういいでしょう（道場から立ち去る男A）」

師範「？」

師範「！ やられた看板を持つて行かれた！ 陽動作戦だったのか
！ 奴はおとりか！」

「教会で」

神父「隣人を愛しなさい」

女「神父様の言つとおり隣人と愛しあつたら夫に家から追い出され
ちゃつたじゃない！」

「採掘場で」

男A「ダイナマイトは仕掛けてきたか?」

男B「はい」

男A「では爆破の準備にはいれ」

男B「しかし、女Aがいません」

男A「うん、俺の妻（女A）はダイナマイトの側で氣絶させってきたんだ。着火開始！」

「ゴルフ場で」

男A「俺はドライバーが得意なんだぜ」

男B「では実力拝見といこうか」

男A「（ドライバーで球を打つ）」

男B「なんだ。百ヤードぐらいしか飛んでないじゃないか」

男A「違うよ。俺の得意なのは運転のほうのドライバーだ」

{おしまい}

ブラックジョーク11

「動物園で」

子供「パパ！ ライオンと飼育員さんがじゃれあつてるよ」

父親「！ 飼育員さんが頭から血を流してるじゃないか！ 襲われ
てるんだ。助けを呼ばないと」

「公園で」

男の子「（砂場を掘つていて）あれ？ 何か埋まつてるよ

女の子「女の人だね……かくれんぼしててるのかな」

「畑で」

女A「あの野菜見て。まるであなたの足のようね」

女B「細いにんじんね」

女A「いえ、あの太い大根よ」

「お花畠で」

女A「綺麗なお花畠に勇壮な自然……素敵ね」

女B 「ええ、 そうね」

女A 「まるで天国みたいね」

女B 「ええ、 そうよ」

女A 「え?」

{おしゃべり}

フラックジョーク12

「喫茶店で」

女A 「あなた最近太った?」

女B 「ええ、最近美味しいお菓子を探して食べるのによつてるの」

女A 「そつなの。やつこねば! 口前にあなたの田那さんを見たけど
痩せていたわよ」

女B 「そつやそつよ。私が食べ係りで夫が探す係りですもの」

「公園で」

女の子A 「お母さんとこな」

女の子B 「じやあ私がお父さんであなたがお母さんよ」

女の子A 「あなたお帰りなさい。」(飯にすすむから)「ぶたないでくれー」

女の子B 「ひー、お前の言ひ通りにするからぶたないでくれー」

女の子A 「なんでそんなこと皿つのよ。お母さんじやないじやな
い」

女子子B 「私のお父さんがいつも呟いてるからよ」

「旅館で」

客「この部屋は他の部屋の一倍の料金だとか。さぞ良い部屋なんでしょうな」

番頭「いえ、二人分のお値段なんですよ」

客「なに、私は一人で泊まるつもりだが」

番頭「いえ、この部屋の壁に人が一人、埋められてるからです」

「おしまい」

フラッシュジョーク13

「家で」

妻「あなた、今日から毎日家事をやつてくれるの？」

夫「ああ」

妻「どうしてそんな気になつたの？」

夫「じゃあ、お前が余命二ヶ月つて医師から聞いたからな……」

妻「そりなの……じゃあ、私も言つたね。私はお医者さんにあなたが余命一ヶ月つて聞いたわよ……」

「パーティーで」

女A「盛大なパーティーね」

女B「そうね。豪華よね」

女A「といひで何を祝うパーティーなの」

女B「えと、うーん。わからないわ」

女C「私も知らないわ」

主催者「実は僕も知らないんですね……」

「居酒屋で」

男A「最近どうだい?」

男B「給料が三十万円になつたんだ」

男A「良かつたな! 昇給おめでとう!」

男B「でも前は五十万円だつたんだぜ」

「家で」

子供「(豆をまきながら) 鬼はつづー・鬼はつづー・」

父親「坊や逆じゃないかい?」

子供「お父さん言つてたじやないか、お母さんが鬼みたつて」

「おしまい」

ブラックジョーク14

「家で」

子供「僕、ニンジン嫌いだーい」

父親「こらこら、好き嫌いしたら駄目だよ。君はもう二十歳になつたんだからね」

「台所で」

奥さんA「今日はあなたが家事する番でしょ？」

奥さんB「昨日あなたがてしなかつたじやない！」

曰那「ストップストップ！ 今日もいつもどおり僕が家事をやるよ！」

「家で」

子供「僕、身長が百四十センチメートルに伸びたんだよ」

祖父「そうか、良かつたね。わしながら百四十センチメートルに縮んだぞ」

「遊園地で」

男の子「お化け屋敷怖かつたね」

父親「ああ、よく出来てたな」

男の子「パパ。人形さん持つてきたらだめだよ」

父親「？」

男の子「肩に足のない女の子の人形がのつてるよ」

父親「幽霊だー！」

「お化け屋敷で」

お化け（人）「うらめしやー！」

お化け（人）「あれ？ おかしいな。人の気配がしたのに」

お化け（人）「なんだい、人の肩を叩いて……あれ……また誰もいない……」

お化け（人）「うわ！ 耳に息を吹きかけるなよ……周りを見ても誰もいない……ギヤーお化けがでたー！」

「おしまい」

「騒がしい飲み屋で」

男「私の妻を事故にみせかけ殺してほしいんだ」

殺し屋「それはできません」

男「なぜだい？」

殺し屋「あなたを殺すよう依頼された人物だからです」

男「うぐつ！ 貴様酒になにかませたな……（倒れる男）」

「占い小屋で」

百パーーセント当たる占い師「あなたの手相を見るかぎり今日あなたは銀行強盗を行い大金を手にいれるでしょう……」

男「そうか！ 銀行強盗は成功するんだな。はい見料。ありがとうございます（足早に立ち去る男）」

百パーーセント当たる占い師「……しかし十分後に警官に取り押さえられるでしょう」

「湯舟で」

子供「息の止めあいこじょうじよひよ」

父親「いいよ。じゃあいくよ。いつせーのーで！」

(三十秒後)

父親「ふはあ！ 苦しかった。俺の息子はなかなか我慢強いな」

(三分後)

父親「おーい。もつそろそろ息をしたらどうだ？ うん？ 口が開いているー。おい大丈夫か！？」

{ むしまい }

今は少し肌寒い春。ガリア氏がベットで寝ているとインター^{ホン}が鳴った。ガリア氏は目を覚まし起き時計を見た。するとまだ朝の三時だった。ガリア氏はインター^{ホン}を無視しようと寝返りをうつた。しかしチャイムは鳴り続けた。しかたなく起き上がり寝ぼけたままドアを開けた。するとそこには初老の男性が大きな鞄を持ち立っていた。おじいさんは、

「あなたの持ち物全てと一億円を交換しませんか?」

そう言った。

ガリア氏は寝ぼけて頭をかきながら喋った。

「本当にですか?」

「ええ、これをご覧なさい」

そう言つと老人は鞄を地面に置き開いた。ガリア氏もかかんで覗き込む。鞄のなかにはたくさんの一円札の束が入っていた。

ガリア氏は眠いながらも興奮してこの話を承諾した。するとどこからともなく数人の黒スーツの男達が現れガリア氏のアパートにある財布、通帳、はんこ以外の物を全てどこかへ運び去った。

老人は1億円入った鞄をガリア氏に渡した。喜ぶガリア氏。老人はそれを見るとその場をあとにした。それを手を振り全裸で見送るガリア氏。

老人は階段を下りながら呟いた。

「あの男、服も電話もなしにどうやって外出するつもりなのか？
ふふふ、やはり寝ぼけている朝早くが狙い目じゃな。これだから金
持ちの道楽はやめられん」

〔おしまい〕

交換2（前書き）

久しぶりの投稿です。感想や評価などいただけたら励みになります。
よかつたらよろしくお願いします m(_ _) m

とある一軒家。そこで昭夫が一人、居間でテレビを見ていたらい
ンター・ホンが鳴った。玄関に行きドアを開ける昭夫。外には青白い
顔をしたスース姿の男が立っていた。その男は言った。

「私は死神です。あなたの命と十億円を交換しませんか？」

昭夫は面食らつて、

「死神？ そんなばかな」

と言った。すると死神はポケットからナイフを取り出し自分の腹に
突き立てた。驚く昭夫。それもそのはず一滴の血も流れなかつたか
らだ。

「私が死神だと信じてもらえたでしょ？」

昭夫は戦々恐々しながらコクコクと頷いた。

「それあなたの命と十億円の交換はどうしますか？」

「いや、命は困る。他のものにしてくれないか？」

「ではあなたの奥さんの命でもかまいませんよ」

考える昭夫。今では結婚当時より大きく太り醜く変わってしまった
妻が頭をよぎった。昭夫は承諾した。死神は、

「三日後の夜十一時に命をもらいますね」

そう言うと霧散する死神。死神がいた場所には札束の山ができてい
た。お札を拾い集める昭夫。

そして三日後の十一時の五分前、昭夫は布団で眠つたふりをして死神が言つた時刻がくるのを待つていた。昭夫は内心本当に妻が死ぬのか半信半疑だった。すると妻が苦しみ、悲鳴をあげベットから滑り落ちた。しかし昭夫も妻同様苦しみだした。昭夫は言つた。

「……お前も……ハアハア……死神に十億円と俺の命を交換したのか……」

妻は苦しそうな表情で言つた。

「……あなたも私の命と……つべ……十億円を交換したのね……」

そして二人とも「くなつた。

〔おしまい〕

がんか

椅子に座つた肥えたおじさんは真剣な顔で話した。

「眼科？」

それに椅子に腰掛けた医者は声を荒げて言った。

「ここは眼科ではありません！」

太つた男はまた

「眼科？」

と喋つた。

医師は腹をたて立ち上がり言った。

「なんどもいいますが、ここは眼科ではありません！ また、あなたに宣告しますがあなたは癌です」

太つた男は言った。

「さつきから言つてるだろ。俺は癌か？ と。はつきり言わされて覚悟が出来たよ」

医師は太つた男の言葉を勘違いしていたのだ。癌かを眼科と。

{おしまい}

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あなたの長所はなんですか？」

「特にありません」

「でわ、あなたのセールスポイントはなんですか？」

「特にありません」

「それではあなたの特技はなんですか？」

「特にありません」

「あなたはうちにうかりたくないんですね？」

「はい、恐くてうかりたくないません」

面接官のエンドマ大王は地獄に入る死人の面接試験を行っていた。
しかし、死人は皆うかりたくない様子の者ばかりだった。

{おしまい}

クローン

今は西暦二千二年。日本の衆議院議員立候補者のタツオは街頭演説をしていた。

「国民の皆様、私が衆議院議員に当選しましたら、まず第一にクローン牛やクローン豚の生産を禁止します」

タツオの周りにいる聴衆の一人が言った。
「よくそんなことが言えるな！」

タツオはムツとして言い返した。

「なぜですか？」

また同じ聴衆の一人が言った。

「お前もここにいる聴衆の半分の人間と同じ顔と同じ体格ではないか」

タツオと聴衆の半分も同じクローンだったのだ。

{おしまい}

病院の個室のベットでおばあさんが横になっていた。名前はサチコといひ。その部屋の横開きの戸を開けて三人のおばあさんが入つて来た。サチコは言つた。

「カヤさんに、トモコさんに、ヤエさん、お久しぶり」

背がわりと高いカヤは

「本当に久しぶりね。十年くらい会つてなかつたわよね」と言つた。

早口のトモコは喋つた。

「また、あなたと話せて嬉しいわ」

サチコは大きな咳をしながら言つた。

「私もよトモコさん……あなたたちが私の前に来たつてことわ、私もこよいよね……それは苦しいかしら?」

ヤエが質問に答えた。

「そんなことはないわ。意外と苦しくないわよ。まあ、一緒に逝きましょ?」

カヤとトモコとヤエは足が無く幽靈でサチコを天国へ連れていくためにやってきていたのだ。サチコは心臓が止まり亡くなつた。

悩み

犬のぬいぐるみのプーさんには強い悩みがありました。それはそれは大きな悩みで海よりも深いものでした。その悩みはプーさんのご主人様の女の子のことでした。その少女はかわいい顔立ちの子供でした。プーさんは常々この手が動いたらあの忌ま忌ましいものを取つてあげられるのと思つていました。

今、プーさんはベットに入つて少女と一緒に寝ていました。「なんとか手を動かしたい。少女を救いたい。神様、一瞬でいいから動かせて」と考えていました。するとプーさんの右手が動くではありませんか。プーさんは少女を起こさないように右手を少女の顔の方に伸ばしました。そして女の子の右の鼻から一センチメートル程飛び出した鼻毛を掴み勢いよく引き抜きました。

「ぐわああ——！」

少女はそう言いましたがまた寝息をたて始めました。プーさんの悩みは少女の伸びた鼻毛だったのです。

「おしまー」

ジャンケンポン（前書き）

感想や評価等いただけすると大変励みになります。宜しかつたらお願いします。

ジャンケンポン

タイチは暇つぶしに粗手のジャンケンポンをすることにした。

最初はグー、ジャンケンポン

ケイか二つでアイ二た

最初にクリーンカンボン

チミキか二でまたアイ二た

「最初はグー、ジャンケンポン」

パーが二つでまたまたアイコだ。

それから五十回アイコが続いた。いい加減飽きたタイチはジャンケンポンを止め言った。

「鏡に映つた自分とジャンケンポンしてもつまんないな」

〔おしまい〕

怖がり

今は春の日中。臆病なクマは恐怖にかられていきました。とても恐ろしい相手に睨まれてクマは身動きができません。クマはブルブルと震えた声で言いました。

「お、お前なんか怖くないんだからな」

クマに対面している相手が一歩クマに近づきました。するとクマは蒼白な顔になり一歩さがりました。

クマが怯える相手はバッタでした。バッタはクマを見ながら言いました。

「逃げないなら食べちゃつべー」

クマはそれを聞くと一皿散に數の中に走って逃げました。

{おしまじこ}

新婚夫婦がベットで一緒に寝ていた。清らかな付き合いをしていた二人にとつてこれが初夜だつた。二人は眠つていたが妻が眠つた状態で動き出した。彼女は夫の鼻を右手で塞ぎ左手で夫の顎を上げて口も塞いだ。そうすると息が出来なくなつた夫は蒼白な顔になり少し暴れたが三分後に亡くなつた。今度は妻が自身の鼻を右手で塞ぎ、左手で顎を上げ……。

{おしまい}

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ここには閑散とした公園。そこに一人の老人が立つて話していた。

「サチコさん、わしと結婚してくれ」

「タイチおじいさん、私達は夫婦になつてもう五十年じゃ ありませ
んか。ボケてしまつたのですか？」

サチコはそつそつと足早に公園を出て行つた。残されたおじいさ
んは独り言を言つた。

「タイチとは誰の事だろ？。わしの名はケイタだし、サチコさんボ
ケてしまつたのかの……。確かわしはケイタじやよな……」

「おじまい」

竹の子

その大きな竹の子は山の傾斜がかつた竹林にありました。大きな竹の子が眠つていると竹の子狩りに老人がやってきました。老人はその大きな竹の子をチラッと見ましたが顔をしかめると別の竹の子を鎌で切り皮を剥いで袋につめました。それから老人は三、四個竹の子を探ると帰つていきました。それからも日をあいて老人は竹の子を取りに来ましたが例の大きな竹の子はどうしても取りません。悩んだその大きな竹の子は竹の子狩りに来た老人に言いました。

「なぜ僕を取つてくれないんですか？」

すると老人は困惑した表情で言いました。

「竹の子の着ぐるみを着た人間なんか誰が取るんだ」

例の大きな竹の子は竹の子の着ぐるみを着た人間だったのです。

〔おしまい〕

飛べる?

男はビルの屋上で田を覚ました。

「あなた、ここは夢の中よ」

男が声の方を見ると妻が腕を組んで立っていた。妻は言った。

「あなたの頬をつねつて」「らんなわい、痛みは無いはずよ」

男は言われた通り右頬をつねつた。痛みは無い。妻は

「夢の世界では空を飛べるのよ。ビルの柵を跨いでジャンプしてみなさいよ」

男は一瞬迷つたが頬の痛みの無い事を考え柵を乗り越え飛んだ。

しかし飛んだのは一秒か一秒ぐらいで後は落下した。男はビルからダイブし死んだ。妻はニヤリと笑つて言つた。

「夫の頬に麻酔をかけていて正解だつたわね。これで保険金がたんまり入るわ」

なんとこゝは現実の世界だつたのだ。

{おしまい}

恋人が事故死した男は悲しみのどん底にあった。そして自殺を試みることにした。まず首吊り自殺を敢行した。しかし強靭な肉体を持つ男は平気だった。仕方なくロープをちぎり地面に降り立ち言った。

「切腹しよう……」

次の日、男は新品の包丁を右手に持ちリビングのソファーに座った。そして腹の部分の服を左手でめぐると包丁を勢いよく突きてた。しかし包丁が粉々に粉碎された。

また、次の日男は練炭自殺を試したが平然としていた。

またまた、次の日ビルの十階から飛び降り自殺を行つた。しかし飛び降りた後、普通に地面に着地してしまつた。男はなぜ自分は死ねないんだろうと考へた。するとあることを思い出し喋つた。

「忘れてた……俺スーパーマンだったな……死ねない訳だ……」

「おしまい」

大介は妻と海水浴に来ていた。砂浜や海は人でごったがえしていた。大介が海で泳いでいると直径二十センチメートルぐらいの紐を見つけた。大介は興味本意からその紐を砂浜に持ち帰った。紐の反対側はどこか海の方にあるようだ。大介は引っ張つてみた、しかしびくともしない。思案していると大介の周りに人が集まってきた。そして口々に「紐を引っ張るのを手伝います」と言い出した。紐を引っ張る人が數十人、数百人になると徐々に紐が海の中から姿を見せ始めた。そうすると「ズボッ」と大変大きな音がしたかとおもうと地震が発生し海に渦ができた。そして段々水位が無くなつていった。最後には海が無くなつた。紐の反対側は海の栓だったようだ。

〔おしまい〕

気になる

葛西一家は夫婦と高校生の娘の三人家族だ。今は三人がテーブルに座り朝食をとっていた。しかし娘はあるものが気になつてチラチラ見ていた。それは父の右頬から伸びた毛だった。その毛は太く、長さは三センチメートルはあつた。娘はお父さんに

「動かないで」

と言つと頬の毛を掴み引っ張つた。すると毛はちぎれるどけろか伸びた。娘はそれを見て面白くなりまたグイッと引っ張つた。頬の毛が三十センチメートルばかりになつた。しかし、その反動か父のフサフサだった頭の毛は大変短くなつた。父の髪が頭の中にすいこまれたのだ。父は頭の違和感を感じたのでしょつ、頭を摩り言つた。

「髪が減つた！」

娘は「ここまできたらぼうずの方がましよ」と考え頬の毛をさらに引っ張つた。

娘の父はそれ以来頭に毛が生えずぼうずのままです。

「おしまい」

菌

宇宙人アーリアは宇宙船に乗り地球の側にやつて來た。目的はアーリアの星の不治の病を治す菌を採取しに來たのだ。その菌はアーリアが発見したばかりのものだつた。地球にしか存在しない貴重な菌で量が少なく足りなくなつたのだ。アーリアは五人の地球人をさらつた。そのうちの一人から菌を手に入れることができた。そして地球人の記憶を消すと、もといた場所にかえした。宇宙船の中でアーリアは呟いた。

「この菌を培養できれば我が星の患者達を救えるな。なんと素晴らしい菌なのだろう」

アーリアは手に持つフラスコに入った水虫の菌を愛おしげに眺めていた。

「おしまい」

分身の薬

「ここは古ぼけたアパートの一室。一つしかない窓から春の温かい日差しがさしこんでいる。その部屋の住人タクオはフラスコに入った緑色の液体を右手に持ちながら言った。

「苦心の末『分身の薬』がついにできたぞ！ これで分身に働かせて俺は遊んでいられるぞ。早速使ってみよう」

タクオは左手で自分の頭髪を一本引き抜くとその髪に緑色の液体をかけた。するとモクモクと煙が辺りにたちこめた。煙がはれるとそこにはタクオとうりふたつの人物が立っていた。タクオは分身に言った。

「これから俺の代わりに会社に行つてこい」

タクオの分身はタクオを殴り付け

「お前が出社しろ」

と凄んだ。それからタクオと分身は喧嘩をした。

「頑張つて働いてこいよ」

タクオの分身は負傷したタクオに笑顔で喋った。

「おしまい」

滅亡

勇者は世界を変えるため旅に出た。具体的な目的は地球を滅ぼしかねない生物を根絶するためだ。そして勇者は全てを跳ね返す鎧兜と一緒に巨大な都市を壊滅させる剣を手に入れた。そして十年の歳月がながれた。勇者はついに一人を除いて地球に害をなす生き物を滅亡させた。勇者は人間を殺していたのだ。勇者は決然とした表情を浮かべると言った。

「人間はおれ以外はいなくなつた。後はおれだけだな……」

勇者は鎧を脱ぐと剣を使って自決した。地球上に人間はいなくなつた。

〔おしまい〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今は春。小雨が降っていた。最強の戦士は一つのハサミをちらつかせながら恐喝をしていた。

「俺様はここいらで最強の戦士だ。その食べ物を渡しな！ 俺様に殺されたくなかったらな」

小さい体格の相手はそう言われ泣く泣く食べ物を渡そうとした。そこへご主人様を連れたチワワがやって来た。最強の戦士はチワワにも一つのハサミをちらつかせたがチワワは平然としていた。チワワは最強の戦士の言った事を聞いていたようで、わざと前足で最強の戦士を踏み潰した。「グシャ」という音がした。最強の戦士は力二だつたのだ。

〔おしまい〕

男は一人で森の大木の横で漫才の練習をしていた。その大木は樹齢数百年で意思を持ち枝を動かすことも喋ることができた。男はボケ担当だった。男は相方とコンビを組んでまだ一日目で漫才を始めたのも最近だ。大木は男のボケを聞きツッコミたくてうずうずしていた。男は続けて言った。

「……僕の恋人は僕のことを愛情をこめて愛称で呼ぶんですよ……『豚野郎』って……。最近恋人と上手くいっていて喧嘩は一日に十回なんですよ……。僕の恋人は恥ずかしがり屋さんで僕が少しでも見つめると照れて言うんですよ……『気持ち悪い、死ねって』……。この前僕と彼女でドライブに行つたんですよ。そして車から海を見てたんですよ。その時僕が恋人に『君はなんて美しいんでしょう』って言つたら、彼女が『くさい』って言つんですよ。だから僕が『ごめんなさい、くさい台詞でしたね、『ご主人様』って言つたら彼女に』お前の口臭が臭いんだよ』って言われたんですよ……」

男がここまで言つたら、我慢できなくなつた大木が枝で男に突っ込んで言った。

「なんでやねん！」

男はその大木のツッコミの際に枝が胸に突き刺さり全治一ヶ月の重傷を負つた。

「おしまい」

中年のタイチがその夢を見始めたのはいつ頃からだらう。夢の中では一流企業の重役を勤め、豪邸に住み、際だつて美しい外見の奥さんがいる。幸せの極みだつた。それに比べて現実は真逆だつた。タイチは毎晩早くベットに入つた。夢の中の幸福を一分でも多く樂しみたかったのだ。そんなある日、夢の中で美しい妻に言われた。

「あなた、私あなたと離れたくないわ。夢の中ですつと一緒に居ま
しょう」

タイチは決心した。夢の中の住人にならうと。現実に帰つたタイチは出社の途中に走つている車の前に飛び出した。それ以来タイチは病院のベットで植物状態になつた。これで夢の世界の住人になつたのだ。タイチは幸福になつただろうと思われた。しかしタイチは頭を強打したためか見る夢も変わつていた。タイチは夢の中で裸族の長老になり不細工な二十人の妻のためにあくせく働いていた。タイチは現実の病院のベットの上でいつもうなされていた。

（おしまい）

テレパシー

公園のベンチに男女が座っていた。女はしかめた顔で言った。

「私、テレパシーができるの。今からあなたにテレパシーを送るわ
ね」

男は意識を集中した。すると頭に言葉が浮かんだ。

（…………『し』…………『ね』…………）

男はびっくりして女に言った。

「死ねって……俺、君に何かしたかな？」

女は首を振って

「違ひわ、もっと集中してー。」

男は渾身の力で意識を集中した。するとまた言葉が浮かんだ。

（…………わた『し』のあしをふんぐるわよ…………はやくじかでよ『ね
…………）

男は急いで足をのけ女に謝罪した。

{おしまじ}

重要な手術

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

手術室でオペが行われていた。大変な大手術であった。ミスは命取りだ。医師はブルツと体を震わせ言つた。

「看護師さん……」

女の看護師が反応した。

「はい、ふー、何でしょつか?」

医師は額に青筋を浮かべて言つた。

「この手術にはこの病院の威信がかかっているのだよ」

女の看護師はしつと「ふー、そうですね」と言つた。

医師は女の看護師を睨んで

「いい加減私の耳にふーと息を吹き掛けるのはやめなさい… 集中できないじゃないか!」

{ おしまい }

いかにして

資産家のコウジは景色を眺めていた。なかなかの絶景である。勇壮な山々、透き通った美しい湖、見えるものは素敵なものばかりだ。すると戸をノックする音が聞こえた。コウジが戸を開けるとそこには友人のタシロウがいた。タシロウは慌てた様子で声をだした。

「聞いてくれ

「タシロウ、君はびっくりして……

「まあ、コウジ俺の話しを聞いてくれ。宝くじが当たったんだ！」

「宝くじが！ それは羨ましい。しかしタシロウ、君はいかにして……

「コウジ、当たったのは一等だぜ！ 僕もこれで億万長者だぜ！」

「わつか、よかつたな。とにかくタシロウ……

「何？」

「こりは約上空一百メートルだよ。僕はヘリコプターに乗っているけど船はどうやってそこへいるんだい？」

{おしまい}

浮浪者のタイチが人気のない砂浜で座つて星空を眺めているところを宇宙人に捕まつた。宇宙船の中で二人の宇宙人はタイチを歓待した。あらゆる豪華な料理、精巧に作られた機械の女、フカフカのベット、しかし風呂だけは入れらしてもらえなかつた。それらの歓迎を一月もうけるとタイチは瘦せていたが太つてきた。しかし、風呂に入つていないので垢もつれだ。タイチが宇宙船の中を歩いていると宇宙人達の会話が聞こえてきた。

「人間のタイチはだいぶ太つてきたな」

「そうですね。もう少し、したらタイチを調理しましょう」

「そうだな、我々は人間の一部以外のものは食べれない体質だものな」

タイチは驚愕した。まさかこんな裏があるなんてと。それ以来食事が進まなくなつた。それからいくじつかたつたある日、宇宙人達は服を脱がせたタイチのある部屋に入れた。そこは宇宙人達に調理室と呼ばれる部屋だつた。タイチは覚悟を決めた。もう逃げられない、死のうと。タイチの体の周りに銃に似た機械がなん個か上から降りてきた。そしてその銃はタイチの全身に光線を発射した。タイチは自分は死んだと思ったが生きていた。そしてタイチの足元に大量の垢が落ちていた。宇宙人達はタイチの側にやつて来るとタイチの垢を食べ始めた。宇宙人達は人間の垢しか食べられなかつたのだ。タイチは安堵の溜息をついた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「私とデートしたいですって、なら私に百万円払いなさい」

男は百万円払つて相手とデートをした。

「私と交際したいですって。なら私に一千万円払いなさい」

男は一千万円払つて相手と交際を始めた。

「私とキスしたいですって。なら私に一億円払いなさい」

男は一億円払つて相手とキスをした。

「私と結婚がしたいですって。……無理よ私まだ男だもの」

「詐欺だ」と男は思つた。

{おしまい}

耐えれない

男は耐えていた。二十分堪えた。全身から冷や汗が滴る。我慢のしそぎか軽い眩暈を催した。男は狭い空間でふらつく。この場では駄目だ。人が密集している。しかし、もう耐えられない。すまない皆、これから起ころる大惨事に耐えてくれ。

「ブー！」

男の尻から出た悪臭が満員電車に立ち込めた。

〔おしまい〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「親子丼、五杯まで四百円か」

男は看板の文字を読むと店の暖簾ん潜り親子丼を注文した。しかし男は親子丼を五杯食べたが満足出来なかつた。男は苦笑いしながら言つた。

「一杯がオチヨコサイズなのは詐欺じゃないか?」

「おしまい」

男は神棚に拝んでいた。男は心の中で（最後のだけは残しておいてください……僕の人生の希望なのです……失つてしまつたら立ち直れないかもせん……後生ですからどうか……神様……最後の一本の頭髪だけは抜かないでください……）

「おしまこ」

回転する世界。男は天を見た。空は雲一つなくとても青かった。男の足が浮き浮遊感を感じる。街を歩く人々が驚きの混じった視線を男に向けた。男は冷や汗をかき、心臓が動悸した。「あっ」と声をだす男。一瞬の出来事だった。男は両手で頭を庇う。男の後頭部が地面にぶつかる。男はバナナの皮で滑つた。

〔おしまい〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

男は言った。

「玉をこめる、目標確認、狙いを定めろ」

男は斜め上に顔を上げた。ターゲットに狙いをつける。一発目が発射された。勢いがあつたが女の横を掠めた。女は強気に喋った。

「相手は下手よ。今度はこっちの番よ。玉を入れて、目標を定めて、発射よ」

女の右鼻にピーナッツを詰め左鼻を指で潰して「ふんっ」と鼻息で発射した。男もピーナッツを発射した。これがこのカップルの秘密の遊戯だ。

{おしまい}

二人の男が一人の女性をめぐつて勝負をしていた。だだつ広い運動場の真ん中で行つていた。彼ら三人しかいない。一人の男は一メートルぐらいの間を空け左足を前に出し向かい合つていた。二人は険しい表情で睨み合つて動かない。女が心配そうに男達を見ていた。片方の男が言つた。

「目がかわかないかい？」

言われた相手は痒みを意識してしまい瞼を閉じた。勝敗は決した。目をつむつたら負けだったのだ。

〔おしまい〕

男の体をジーンとする痛みが駆け抜けた。なんとも言えない痛みだ。相手にやり返したいが相手に悪気は一切ない。自分の不注意のせいなのだ。悶々としていたがやり返すことにした。蹴りを二三回はなつた。相手は身じろぎもせず何も言わない。男は筆筒の角に足の小指をぶつけたのだ。

〔おしまい〕

疑問

お姫様は王子様と恒久に幸せに過ごしました。しかし、お姫様には疑問がありました。王子様のキスで魔法使いの呪いがとけたのですがあの時のキスは普段のキスと違うと。あの時のキスはもつと大きな口が相手でよだれを垂らしていたはずだと。別人ではないかと思つておりました。そこでお姫様は王子様に詰問しました。

「あなたは私が呪いで眠つている時にキスしてくれたのよね？」

それを聞いた王子様は慌て始めました。目がキヨロキヨロして落ち着きもありません。王子様は小さい声で白状しました。

「実は聞こえが悪いから黙つていたんだけど……君は僕のキスではなく僕の乗つっていた白馬の接吻で目を覚ましたんだ……」

それを聞いて以来お姫様は王子様に対する態度が少し冷たくなりました。

〔おしまい〕

・・

「……シン ハリサモト様と幸せに暮りこみました」

と女子は本を読みました。女子は笑顔になつて心の底から喜みました。

「シンデ ラは幸せになれるのね。良かったわ」

女の子が椅子に座り机に向かってこねと膝下から意地悪な姉達の声がしました。

「シンデレ ! 昇く降りて来て掃除をしなさい。私達は今夜お城の舞踏会に行かなきゃならぬのよ。あなたはもう一人留守番

よ。」

{ おとぎ話 }

男は車の後部座席に座っていた。男はニヤニヤ顔で満足そうであった。それもそのはず、片思いだつた可愛い女の子とキスしたのだから。気分は有頂天でどんなことがあつても気にならないだろう。男の隣に座つていた女が言つた。

「そんなに、ニヤニヤして、あなたは自分が何をしたか分かつてるの？」

男は幸せそうな笑顔で言つた。

「ええ」

女は軽蔑した表情で喋つた。

「あなたは嫌がる女性に無理矢理キスをして逮捕されたのよ。反省したらどうなの？」

男は自身の両手にかけられた手錠を一瞥してパトカーの窓から見える景色を眺めた。しかし彼の心は満たされていて幸せだった。

「おしまい」

「僕が自宅近くにある公園でタバコを吸っていたんです。すると背中に純白の羽を生やした女の人が空から降りてきて言つんですよ。『あなたの願いを一つだけ叶えましょう』と。だから僕が『お金が欲しいです』と言つと、『千回ジャンプして、手を三百回叩きなさい。そうすれば願いが叶うでしょう』と言われたんです。女はその後また空へと帰つていきました。女の言う通りにすると空から大量のお金が降つてきたんです。僕はだから大金を持っていたんです……いい加減信じてください裁判長……僕は銀行強盗はやっていない

〔おしまい〕

「やつたぞ、家が新築になつたぞ。ワーイ、ゴロゴロしよう。そしてジャンプだ、とお！ あ、痛！ 頭を打っちゃつた。庭に男の人
が入つて來たぞ。ここは男らしく言ってやるう！」

庭に入つて來た男は言った。

「ポチ、僕が手作りした新家はどうだい？」

ポチは「主人様だと分かり尻尾を振り「ワン」と鳴いた。

「おしまい」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

男は人生の十字路の真ん中に立っていた。右の道は自といつ看板があつた。多分自殺だろう。男は前の道を見た。看板にはホと書かれていた。ホームレスの略だろう。次に左の道に目をやつた。看板には飢とあつた。飢え死にのことだろう。男は最後の希望を持つて後ろの道を見た。看板にはニューと書かれていた。ニューライフの略だろうか？ 男はニューの道を進んだ。

男はニュー・ハーフになった。

「おしまい」

男は深夜の街を徘徊していた。真夜中であるため人っ子一人いない。男は辺りを見回しそこからか声らしきものを出し言つた。

「…………ない…………あつた…………」

男は洋服店の窓ガラスを手に持つ大きな斧で叩き割つた。そして男は男のマネキンの頭を引っこ抜いた。割れたガラスのかけらに映る男には首から上がなかつた。男はマネキンの頭を自身の首の上に置いた。すると男の首とマネキンの頭がくつついた。男はマネキンの頭部なのにニヤつと笑つた。

「おしまい」

「あなたの息子タイチを預かった。返して欲しければ次のものを用意して……」

血弾のコレクシングで震える手で受話器を握るタイチの母親は言った。

「分かりました。だから息子を無事に返してください」

少し間があつて男の声が受話器から聞こえてきた。

「要求するものを言つよ。モン ンの新作のゲームに板チョコレー
トを十個六千円だよ」

お母さんは氣付いて怒り受話器に罵つた。

「ひひ、タイチ！ あなたまた誘拐されたフリをしてるでしょ！
もつ十回田よー 早く帰つてきなさいー！」

タイチは不思議がりながら公衆電話の受話器に喋つた。

「なんでこつもばれるの？..」

{おじまこ}

夜遅く女はよそ見運転をしていて男の人をひいてしまった。女はとても動搖した。女は車を急いで停めると倒れている男に駆け寄った。しかし意識が無い。近くに警官がいたので話しかけた。しかし警官は何も言わない。まるで死んでいるようだ。女は警官を車でひいたことに動搖してすぐには気付かなかつた。

{おしまい}

「私の自慢はこの絵画達と妻です。え、この壁の絵達は本物かです
つて。よく分かりましたね。全て贋作ですよ。私が趣味で書き上げ
たんです。寸分の狂いもなく描いたつもりです。え、あなたは自慢
が妻なんてなんと愛妻家なんでしょうって、そうとも言えますね。
まあ妻を見てくださいよ。えっ、妻がニコール・キッマンに瓜二
つですって。そうでしょう、私の贋作の最高傑作が彼女なんですよ。
早い話が整形手術ですね」

{おしまい}

・・・

部下は大統領に言った。

「大統領は凄いです。なんせ地球の国々を統一して一つにするなんて」

大統領は笑顔で喋った。

「難しそうだけど簡単だったよ。特に障害もなかつたからね」

部下は大統領をもちあげる。

「大統領は天才です。偉大な方です」

と第三次核戦争を経て地球最後の生き残りとなつた一人は話していた。

「おしまい」

溺れる

歳をとつた老人が川で溺れていた。老人は始めバタついていたが徐々に動きが鈍くなり川のそこへ沈んでいった。老人は亡くなつたろうと思われたが青年が川に飛び込み老人を助け岸の上に上げた。老人は水を吐き出しながら言つた。

「危うく死ぬところだつた。ありがとうよ、青年」

しかし青年は首を振り喋つた。

「あなたはもう死んでいますよ」

老人は疑問に思い質問した。

「なぜじや？」

青年は言いにくそうに

「なぜならあなたは三途の川で溺れて、川の向こう岸にあるあの世に来てしまつたからです」

「おしまじ」

十年後

女は自室で鏡を見ていた。その鏡は最近発売されたもので鏡に映つた者の十年後の姿を映すものだつた。女は鏡を見て仰天して氣を失い倒れた。

鏡には白骨化した女の姿が写っていたのだ。

「おしまこ」

半分だけ

ある休日、男が自宅のアパートで昼寝をしていたら振り起こされた。男が横を見ると背中に羽を生やした女の子がいた。女の子は

「私はお昼寝の妖精見習いです。卒業試験に一人の願い事を叶えなければなりません。何か願い事はありませんか？」

男はそれを聞きとび起きた。そして少女をまじまじと見る。どこか神秘的な雰囲気を醸し出している。本当に妖精のようだ。男は思案して言った。

「じゃあ、出世させて」

妖精は付け加えるように

「でも、私まだ見習いだから願い事は半分しか叶えられないんですね」

男は「いいよ」と言った。

妖精は二ツコロリと微笑むと姿を消した。それから数日が経つた。

男は会社では平社員のままだつたが家庭で昇進した。家事手伝いから主夫に。

願い事

「お前は永遠にわしの願いを叶え続ける」

「はい、私はあなたの願いを永遠に叶え続けます」

催眠術師は突然現れて「あなたの願い事を一つ叶えましょう」と言つた小人のような妖精に催眠術をかけた。これで世界征服も可能だろうと思われた。催眠術師である老人は一つ目の願いを口にした。

「わしを五十歳若返らせてくれ」

妖精はパチンと指を鳴らした。

老人は若返り青年になった。催眠術師は喜び言った。

「これでもう一度人生を堪能できるぞー！」

妖精は

「…………私はあなたの願いを永遠に叶え続けます…………」

そう言つとまた指を鳴らした。すると催眠術師はだぼだぼな服を着た赤ん坊になつた。妖精はまた喋つた。

「…………私はあなたの願いを永遠に叶え続けます…………」

妖精はまたまた、指を鳴らした。催眠術師は受精卵になり最後は消えて無くなつた。

{ おこせ }

願い事（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました（――）

もう一つ『一人漫談』という虛偽ネタ満載のコメディー小説を連載しております。良かったらそちらも読んでいただけないと嬉しいです。

大森康夫はテーブルの上に置かれた物に目がいった。一つは表に遺書と書かれた封筒でもう一つは開かれた遺書の中身の手紙であった。康夫は遺書の文面を黙読した。

『僕は人生に絶望し命を絶つ決意をしました。思い残すことは何もありません。親より先に死ぬ不幸をお許しください。僕は家族や親戚の皆のことが大好きです。皆さんが幸せになることを天国で祈つております。

大森康夫』

康夫の幽霊は思い出して言った。

「どうか、僕自殺したんだつたな。忘れてた」

「おしまい」

男には前世の記憶がいくつもあった。男は四代前的人生で大島奈津子といつ会社の同僚に刺され死亡した。三代前的人生では古賀敏江といつ高校の時の同級生に毒を盛られ殺された。二代前的人生では江森静といつ近所さんの女性に首を絞められ殺された。前回の人生では片岡夏といつ上司に撲殺された。男は前世を振り返つてあることに気付いた。

「おおしまなつ」……「がとしえ……えもりしづか……かたおかなかつ……全部がしりとりになつている」

男は高い崖から突き落とされて落下していた。その時にある「」とに気付いてホッとして言つた。

「今回僕を殺したのは妻のつがかりんだ。最後にんがつていい。これで来世は殺されなくてすむぞ。良かつた」

{おしまこ}

思い

あるところに高邁な精神を持つた青年実業家がいた。彼は公然の場で平和について訴えていた。青年は世界平和の一助として多額の寄付をし尊敬の念を集めていた。そんな彼の前に妖精が現れて言った。

「あなたのいつも願っている事を叶えましょう」

そして妖精は姿を消した。それから数日が過ぎた。しかし世界は紛争等が絶えず平和にはならなかつた。そのかわり世界中の衣類が消えて無くなつた。青年実業家は世界平和よりもスケベ心の方が強かつたようだ。

〔おしまい〕

俺は大変な物を踏ん付けてしまった。柔らかくフニユとした感覺が生々しい。なんて自分は愚かなのだろう。足元に氣を配っていたらこんな惨事にはならなかつたろうに。不注意が嘆かれる。

俺はウンコを踏んでしまつた。会社に出勤の際と帰宅の時の一回も。しかも同じウンコだった。

〔おしまい〕

不思議なやまびこ

山田大介は仲間と山登りをした。頂上につくと美しい景色を堪能した。その後お弁当を食べた。とても美味しかった。その次にやまびこを聞こうと大介は立ち上がり崖っぷちから隣の山に向かって言った。

「沢田千賀子さん！ 死ぬ程大好きだー！ 僕と付き合つてください！」

するとやまびこ？ がかえつてきた。

「山田大介さん！ 私、千賀子もあなたのことが大好きでーす！ 嘉んでお付き合いしまーす！」

沢田千賀子も仲間と隣の山を登つっていたのだ。

「おしまー」

そいつは毎日虐められていた。強烈なパンチがとんでもくる。右フックに左ストレート、右アッパー。いつもいたぶられついに皮が破れ中身が漏れだした。

ボクシングジムの社長はそいつを見て言った。

「ついに古いサンドバックが壊れたか……新しいのを注文しつづけ

「おしまい」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

美しい顔立ちの女がアパートの一階にある一室で着替えをしていた。すると外から鳴き声が

「ノーハン、ノーハン、ノーハン」

美人の女は急いでズボンを履き上着を着るとベランダにつながる窓を開け言つた。

「この変態男！ また、蝉のふりをして私の着替えを覗いてたのね！ もつ警察に訴へわよー！」

男は言つた。

「ノーハン、ノーハン、すいませんでした。警察だけは勘弁してください」

{おしまい}

（感想）

『』の小説達は稀に見る駄作である。こんな作品を書く作者の気が知れない。ただの文章の羅列で起伏がなく読者に訴えてくるものが皆無である。こんな小説を公開することは禁止されてもおかしくない。作品同様作者も存在価値のない駄目人間に違いない。作者はなるべく早く筆を折るべきである。これ以上つまらない凡作を世に生み出すのはある意味犯罪である。罪を犯した者は刑務所に入らなければならぬ。つまりこの小説達を作った作者もしかりである。言いたいことは以上である。

あなたの愛用のパソコンより『

徹夜して小説を書いた日の朝パソコンを見るとW.O.D.にて上のよう書かれていた。

（おしまい）

ひつそりと

ある日の夕方。人間には姿の見えない宇宙人は街中をさ迷つていった。そして宇宙人は知つていた。人間にとりつかなくては自分は死んでしまうことを。しかし一度とりつくとその人間が死ぬまで離れられなくなる。宇宙人はひつそりと暮らすためにどこにでもいるような犬の散歩をしていたおじさんにとりついた。そして翌日、元宇宙人は買い物に岡かけた。しかし元宇宙人は自分が大きなミスを犯していたことにきづかされた。ひつそりと暮らすことは困難であると。街で出会つた人々は元宇宙人をみると決まって顎の下に右手を水平に浮かして言うのである。

「アイー」と。そして元宇宙人も渋々返すのである。「アイーン」と。

「おしまい」

・・・・・・・・・・・・

(1)

「僕の辞書は元はナポレーンのものなんだが」

「え、ナポー... ナポレーン?」

「不可能といつ語彙を切り取ったからさ」

(2)

「俺胸が苦しくて病気みたいなんだ。君の辞書に治療方は載つてないかい?」

「どうこう病気なの?」

「君に対する恋患いや」

(3)

「この分厚い辞書に載つてないことなんだけど教えてくれないかな？」

「いいわよ、私にわかることならね。それで何が知りたいの？」

「素敵な君の口説きかたをね」

「おしまこ」

・・・・・・・・・・

「ここはまだ広い駐車場。一人の美女をめぐつて二人の男が決闘をしていた。男達は一メートルぐらい離れて闘っていた。近くに女の姿もあつた。男達は真剣な顔で向かいあつっていた。片方の男が右手の人差し指のみを伸ばし機敏に動かした。すると相手の男は俊敏に顔を動かした。今度は逆の男が右手の人差し指のみを伸ばし素早く人差し指を動かす。それを見て相手の男は顔を右に向けた。決闘している二人は口づさんでいた。

「「あつち向いてほい！」」

「おしまい」

世界を旅していた勇者アベルはいつそりお城を抜け出していたお姫様イーナと宿屋で出会った。二人は一目あつた瞬間から恋に落ちた。二人は駆け落ちをしてその国から逃げ出した。そして一年後、魔王を倒し世界に平和をもたらしたアベルとイーナは小さい国の元首になつた。イーナはベットに横たわつていた。そしてイーナはこぶりなベルを鳴らした。するとドタドタと足音が聞こえた。そして部屋のドアを開けアベルがやつてきた。イーナは目をつむつたまま言った。

「足」

アベルはイーナの側にやつてくるとイーナの足をマッサージし始めた。イーナは心地良さそうにしながら

「ワイン」

アベルはテーブルにあつたワインをコップにつきイーナに渡した。イーナは一息にワインを飲み言つた。

「ワインおかわり」

アベルはイーナの持つコップにワインを注いだ。イーナは歳でまり動けなかつた。イーナは今年九十歳になつた。アベルは今年十歳になつたばかりだ。イーナはしんじやうに言つた。

「あなた、私が魔王を倒した事をばらされたくなかったら献身的にはたらくのよ」

アベルは元気よく

「はい、『主人様』

と言つた。

{おしまい}

ハッピーハンド

貧しいな女子ルーは王子様と結婚し幸せに過ごしましたね。

「おしまこ」

ホームレスの女ルーは大金を拾い楽しんで人生を過ごしましたと
KU。

「おしまこ」

野良犬のルーは優しい女子に拾われハッピーに暮らしましたと
KU。

「おしまこ」

虚められた子のルーはがき大将をやつつけ、その後勝ち組の人生
をおくりましたとさ。

「おしまこ」

女王のルーは敵対国を倒し世界統一を果たしましたとや。

〔おしまじ〕

お姫様のルーは……

（私の番だわ！ 私の名前もルーだしハッピーハンドは確実ね！
良かつたわ、どうハッピーハンドになるのかしら）

……。

〔おしまじ〕

（ええ！ ひょっと終わっちゃったじゃないの！ 私もハッピーハンドに……）

〔おしまじ〕

切る

男は切っていた。ぱらぱらにみじん切りにしていた。一度埋めたやつを掘り返したのだ。散々てこずらせやがってと男は思っていた。不意に涙が男の両尻から流れた。悲しみを覚えた訳ではない。やつをさやんでいのとついつい泣いてしまうのだ。

男は玉ねぎをやがんでいた。

「おしまこ」

困難

『虎』「僕は大変なものに挟まれてしまった。前門の虎に後門の龍とは。どう生き延びよいか」『龍』

『虎』「さうだ声を大にして助けを呼ぼう。誰か助けてくれーー！」
『龍』

『勇者？』『虎』「勇者が来てくれたぞ。これで助かった」『龍』
『勇者？』「勇者が虎を退治してくれたぞ。ワーウ。ありがとうございます」『龍』

『山賊』「しまった。勇者と思っていたら山賊だったとわ。グワッ！ 山賊に刺された……」『龍』

『山賊』「……」『龍』

{ おしまじ }

許れない

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

男はリビングで椅子に腰掛け女と喋っていた。

「いい加減許してくれないか？」

女は顔を横に振りながら

「絶対許せないわ」

「これからも俺に付きまといつづりののか？」

女は男を睨みながら言った。

「さうよ。あなたに不倫されて私はそれを苦にして自殺して死んだ
けどあなたが生きている間は側を離れないわ！」

女は全身が透けていた。幽霊だつたのだ。

「おしまじ」

留守番電話メッセージ一

『もしもし良江よ。結婚してくれないなら死んじゃひからねー。』

留守番電話メッセージ二

『もう、木にロープを呑したわ。早くプロポーズしなさいうなつても知らないわよー。』

留守番電話メッセージ三

『今、呑み切ったわ。後は首を呑るだけよ。早く愛の言葉を囁かなれー。』

留守番電話メッセージ四

『ぐ、苦しい……今……首を呑ってるわ。最後のチャンスよ。呑みしなさいー。』

留守番電話メッセージ五

『恨めしゃー死んじゃったわ。愛の告白をしないと、とつづくわ』

一人暮らしの会社員美紀子は何度もかかって来る愛の告白の催促の電話に恐怖していた。死んでしまった良江は間違った番号に電話していたのだった。

「おしまこ」

ハカセは怪物を生み出す張本人だ。ハカセは所属している組織にこれ以上怪物達を作り出したくないと直訴した。しかし認められなかつた。仕方なく自室で怪物を生み出す作業をしていた。隣には組織の女が立つてハカセを見張つていた。女は言つた。

「ハカセ、しつかり作つてくださいよ」

ハカセは渋々うなづいた。それから数時間経つた後ハカセは喚いた。

「俺はこれ以上殺戮を繰り返す怪物は作りたくない！」

すると傍りの女は言つた。

「羽下瀬、あなたの仕事は怪物スリラーものを書く小説家なんですよ。怪物を書かないでどうするんですか？」

羽下瀬は書きかけの原稿用紙をビリビリと破いた。

「おしまい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4005i/>

不思議なお話（短編集）

2011年6月18日15時16分発行